

『でも、好い間取りね。この勝手と湯殿の具合が好いぢやないの？ それから勝手と茶の間のしきり戸が好いわね。これなら、勝手から向う側に物を出したりするのに好いのね……。これはねえさんが考へたのよ』こんなことを言ひながら二人はぐるぐる家屋の周囲を歩いた。その間、かね子は杜の傍に行つて小さい黄色の花を摘んでゐたりなどした。

1011

お糸は新吾に言つた。

『さうね……。本當のことはやつぱりわからないわね。それは私、ちひさい時から見て來ていろんなことを知つてゐるからわかるやうな氣がするけど、それだつて本當だかわかりやしない……。やつぱりかういふことは、その中に入つてゐるものでなくつちやわからない……。』

『それはさうだけでも……。あれでもう何うにもならずにつゞいて行くかしら？』

『私、行くと思ふわ……。つゞいて行かなければつまらないわ』

『つまる、つまらないを言つてゐるんぢやないよ……。何うだらうツて言ふんだよ』

お糸はちよつと考へて、

『兎に角かうは思ふわ。姉さんも三四年前まではをぢさんを疑つてゐるやうなところがあつたけれど、この頃ではもうそんなことはなくなつたらしいわ……。あなたは知らないかしら？』

『何かそんなことがあつたかえ？』

『別にありやしないけれども、そら田舎の話……。』

『田舎のKといふ女のことかえ？』

『先生はそんなことはないツて言ふんだけど、數年前まではそれを氣にしてゐる』

たわ……。それでよく先生が田舎に行く時にはくつついて行つたものよ……。そして歸つて來てはつまらなさうな顔をしてゐたことがありましたよ……』

『さうかねえ……。』

『でも、此頃ぢやもうそんなこと考へてゐないらしいわ……。やつぱり姉さんだちにもいろいろながあつて、そしてあゝいふところまで行つたといふ氣はするワね。』

『不思議なもんだな』

若い人たちは、當然わかり切つてゐるやうなことにも、ある一種の不可解を感ずるらしかつた。

『それで姉さんたちくらゐの年の戀と、我々時代の戀とでは、餘ほど違ふところがあるんだらうな？』

『さ、それは何うですかね……。やつぱり同じぢやないのかしら？』

その新建ての家から自分の家の方へと歸つて來ながら、新吾とお糸とはこんな話をした。お糸にしても、もはや昔のやうに無條件に姉をこはいものとは思つてゐなかつた。かれ等の前にもひろい人生が展けて來てゐた。仲の好いのと堅いのとでお銀の母親もお銀も信頼してゐる新吾にも、この頃疑へば疑へるやうな事柄もあるのだつた。『あなたはこの頃随分わくなくなつたのねえ？』こんなことをお糸も何うかするといふことがあつた。つい此間も『不意に宿直をさせられちやつてね……。』などと言つて一夜家を明けたりなどした。

さうかと言つて、お糸はそれをお銀の母親にもお銀にも打明けて話すのではなかつた。妻の身にしては、成るだけ夫のことを母親や姉に知らせたくなかつた。でも、それが二度になり三度になると、お糸もだまつてゐられないやうな氣がした。ある日、話すともなくそれをお銀に話した。

お銀は嘆くやうにして言つた。

『さうかね……、新ちやんにも、やつぱりさういふことがあるのかね……。男ッていふものはさういふものかしら？』

お糸は言ひだしては見たが、後には、姉や母親に心配をかけることを恐れて、それほど大したことはないやうに言つたりした。

一〇三

ある日、その郊外の新建の家の前に箆筒や長火鉢や大きな風呂敷包を載せた運送車が二臺も三臺もやつて来た。それは、もはや寒い風が鉋屑や紙屑をあたりに吹き散らすころだつた。木の葉は大概落ちつくして、家を建て始めた時分にはまだそれと見えなかつた向うの村の藁葺の家屋に細く烟の揚がるのが疎らな林をすかして指さされた。荷物の來るのが遅いのを心配して出かけて行つた父親は、お宮のところに向うからやつて來るのに逢つたと言つて、尻端折をして莞爾してつ

いて來た。お銀やお銀の母親や志摩子はもうさつきからそこに來てゐた。

お糸も手傳ひに來てゐた。

『何しろ、遠いんだからね——』

新しい生活がめづらしいといふやうにして、機嫌よくお銀の母親は迎へた。下町の大店の生活から零落して長い間浮世の底に侘しく沈んでゐたのが、たとひ生活の形式は違つたにしても、やつと少し浮びあがつたといふやうな喜悅が、その態度にはつきりと見えた。

『それでも途中で逢つて好かつたのね……行違ひになりやしないかと思つて心配してゐたんですよ……』

お銀の喜びはその效々しく襷がけになつた姿に見えた。

まだ門は半分出來ただけだつた。一間に七八本並べて栽ゑた疎らなかなめの生垣が新しくあたりを取巻いてゐるのも、穿つたばかりの井戸に新しいポンプが仕

かけられてあるのも、それをめづらしさうに志摩子が力一杯押したり上げたりすると水が口からちよろちよろ落ちるのも、日あたりの好い縁側に一番先きに車から下して運んだ盆栽の鉢が並んでゐるのも、踏む度に備後表の新しい疊がキウキウ音を立て、鳴るのも、すべてその新しい喜びを語らないものはなかつた。六疊に母親好みの丸窓が明けてあつて、そこから裏の庭が見えるやうになつてゐるのもあたりを明るくした。志摩子は喜久子やかね子と林に行つたり野に行つたりして遊んでゐたが、後には縁側の隅のところに頭を集めて頻りにをばさんごつこをしたりなどした。

お糸も襟がけになつて、庭の方からバケツに水を一杯汲んで来てお銀と一緒にせつせと白い粉の出てる青い新しい疊を拭いた。と、そこに母親がやつて来て『これから、つやを出すまで縁側を拭くのは大變だねえ』などと言つた。さうかと言つてそれを厭つてゐるのではなかつた。兎に角自分の家になつたといふのが

嬉しいのだつた。

次第に荷物が車から家へと運び込まれた。箆筒、茶箆筒、長火鉢——母親も今は落附いて見てゐるわけに行かなくなつた。着物を着替へて、お銀と一緒に箆筒を居間の方へと運んで来た。

一かたづけしてから、『まあ、お前、急いですると骨が折れるからゆつくりする方が好いよ。何も急ぐことなんかちつともありやしないよ』母親はこんなことを言つて、一先づそこに置くことにきめた長火鉢の前に坐つて、長い煙管でたばこを吸つたりした。

そこに蕎麥屋がせいろを山の様に積んで、井戸の傍を通つて、南縁のところをそれを並べて置いた。と、一番先に志摩子が飛んで来て、『をばアさん、私に頂戴、私、お中がすいちやつた——』かう言つてそこに坐つた。喜久子もかね子もついでにやつて来た。

一はたらしめた後で、母親とお銀とは居間の長火鉢を置いたところに向ひ合つて坐つて、大工の鉋屑や板きれのまだ本當に片づけられてない裏庭を眺めた。茶が淹れられて昨日新吾の宅から持つて来た羊羹などが切られた。

『この裏にも梧桐か何か二三本栽ゑると好いね!』

『さうだね……さうでもしないとこの室は西日がさすからね……』

そこからは廊下を通つて八疊に行けるやうになつてゐた。そこには震災後出来た箆笥を二棹並べて置いた。島田はそれが出来た時、『箆笥ばかり立派でも入れるものがちつともないぢやないか。まだガラ明だらう……』などと言つて笑つたが今では二つともあら方着物で一杯になつてゐた。母親の着物なども新しいのがかなり出来た。

『さう言へば、さつき酒屋も八百屋も来たし、肴屋も一日おきくらゐにやつて来るつて言ふからそんなに不自由はなささうね……』

『さうかえ! それなら好いねえ』

母親にしても向うで想像してゐたのとは違つて、かうして此處にやつて来て見ると、また別な感じがしみじみと味はれるのであつた。何だか自分の家ではなくて田舎にでもやつて来たやうな氣がするのだつた。平生見馴れてゐた箆笥や長火鉢が此處に置かれてあるのが、ともすると不思議にさへ思はるゝのだつた。

茶を啜りながら、

『お前、随分違つた感じがするね……』

『さう』

お銀は、のんきさうに言つた。

『向うにゐた時と比べると、丸で世界が違ふやうな氣がするね……』

『それはさうね』

『お前、さびしくないかえ？』

『さうねえ……もうかういふ氣になつて了つたんですもの……』

『さう言へば、さうだけでも……。よくお前がさういふ氣になれたね？』

『だつて、もうかういふ風になつて了つたんですもの……』

母親が五十年も通つて來た都會生活から容易に脱却して來ることが出來ないやうなのに引きかへてお銀はさつぱりとそれを忘れて了つてゐるのだつた。かの女に取つては、三味線や唄の世界、賑かな明るい世界から全く離れて來て了つてゐるのが喜ばしいのだつた。兎にも角にも此處まで來た——さういふ氣がお銀にはするのだつた。

『樹を栽ゑたり、庭を拵へたりすると、好い家になるわよ』

『それはさうともね……。何しろ木材きだつて好いのがつかつてあるんだから——』

かう母親は言つたが、急に思ひついたといふやうに、

『こゝこゝに山梔くまじを一本栽ゑたいね』

『そんなことわけないわ』

『何うかして山梔が栽ゑられるやうな家に行きたい、行きたいと思つてゐたんだから——』母親には昔娘時代に見た茶の湯の師匠の家の庭がそれとなく浮かんで來てゐるのだつた。それに山茶花が好い、あれも栽ゑたいと母親は言つた。

『あれが丸窓のそばに栽ゑてゐるのは好いもんだからね……。あれはちやうど今頃だね。さうだ、霜がおく時分なんだから……』

茶を啜りながら、こんな話が暫しつゝいた。

一〇五

お銀にしてはいろいろな周圍から全く脱却して來たことを喜んだ。最早かの女

は隣に住んでゐる女學校の女の先生にも氣がねしくともよくなつた。また借りてゐた家主の妾にもちやほやしなくとも好くなつた。曾て向うにゐた時その家主を知つてゐたりする關係から、わるく世間から誤解され易かつたが、それからも全く自由になることが出来た。『本當に、それだけは好い……。さばくしたやうな氣がする……。だつて、あの女の先生、うるさくつてしやうがないんだもの……。』お銀はかう言つて母親の方を見た。

『本當に、うるさかつたね。自分が不自由してゐるから、それであゝいふ風にやけるんだね……。』

『だつて、妾、妾ツてきこえよがしに言ふんだもの……。何うせ、さういふ人だから、私なんかとは違ふなんて、わざときこえるやうに言ふんだもの……。やつぱりやつかむのかねえ。だつて、さうでなければあんなこと問題にしなくつたつて好いことなんですもの……。』。他が何う言ふ生活をしてゐようが好いぢやないの

『やつぱり自分が不足だから、他のことが氣になるんだよ』

壁一重向うが隣であるといふ面倒臭さ——歩く足音にも氣がねしななければならず、長火鉢に相對しての話にも成るだけ低聲を用ゐなければならず、二階の階段の鳴る音にも氣を配らなければならず、ことに嬬々として長く盡きずに語り合ふ戀愛の私語にも絶えず隣が顧みられるやうな細かな氣持——此方から下手に出てつき合へばつき合つたで面倒臭い空氣が醸され、またそれをびたりとやめて了へばやめて了つたで向うの感情を害して、わるく壁だの戸だのに當られる不愉快な氣持——さういふもので何べん移轉の話が持ち出されたか知れなかつた。『もうとてもこんなところにはゐられないから私引越すわ！』お銀はよくかう言つたことをくり返した。それは今まで度々さういふ心持になりながらも移轉が出来ずにゐたといふことは、他に原因もあつたので——最初に家主にわたした敷金がかかり

に多額である上に、容易にそれが回収出来さうにもなかつたのもひとつの大きな原因になつただけけれども、しかもさういふ隣からまぬかれるために、何遍家をもその近所に捜したか知れないのだつた。

『今朝、おわかれに行つた時、あの女の先生變な顔をしてゐた！』

『それはさうだらうね』

『まア、結構なことですね……なんて言つてゐたけども、腹では確なことを考へてゐやしないのよ……』

『でも、もう好いぢやないか。あんな人たちのこと……』

『だから言ふのよ、さばさばしたツて。こゝならそんなことをおせつかいに問題にするやうなものはありませんからね。お隣にだつて遠いし、その遠いお隣に住んでゐる人だつて、ごくずる人の好いお百姓なんだから……』

『さういふことは煩さくなくつて好いね』

『私、何だか、世間のいろいろなやなことからやつとぬけ出て來たやうな氣がする……。さうして見ると、やつぱり借家住ひをしてゐるのと、自分の家だといふのでは、心持が丸で違ふのね。それが好い心持ね』かう言つたが、そこを妹が襟がけで通つて行つたので、『お糸、お前も一やすみ休んでお茶でもおあがりな！』と聲をかけた。

一〇六

酒飲みの家主から離れて來たこともその喜びのひとつだつた。それは別に問題にすべきほどのものではないが、たゞ昔向うにゐた時分そのお座敷に出たことがあつたりしたので——震災後の家屋のない時にもその縁故をたどつてその持家を借りたのだが、何ぞと言つては酔つてやつて來て、家のものをも家のものでないやうに取扱つたりするので、近所の思はくに對してもいやな思ひをしなければな

らなかつたのであつた。それに、その妾がやきもちやきで、何ぞと言つては變にかんぐるやうなことを言つた。それは島田も、その間のことをよく知つてゐるので、別にそれに對して何とも思はず、『ゆうべは酔漢よっぱらひが來て弱つたんですよ。丸で何にもわからなくなるんだから困るのよ……』などとお銀が話してきかせても、別にそれを問題にしようともしなかつたが、それでもあまりひどすぎるので、時には家の人が寄つてたかつて、だまして外につれ出して行くやうなこともあれば、『もう酒、好いでせう。もう家に酒なんかありませんよ』と愛想づかしを言つて送り出してやることもあり、また時には何うしても歸らぬのに持餘して、お銀が行つてその妾を呼んで來て、無理々々つれて行つて貰つたりしたことなどもあつた。それでゐて、酔つてゐない時にはわかりの好い人で、他の家を昨夜あのやうに騒がしたことなどは忘れて、『何うもゆうべは非常に御馳走になつて……』などと別人のやうに丁重に口をきくのだつた。だから別に何でもなかつたけれども——た

まにはその持つてゐる自動車を借りたりすることも出來て便利だつたが、しかもそれについて隣の女の先生などに何の彼のと陰口をきかれるのがいやだつた。お銀はそれから完全に脱却して來ることが出來たことを喜んだ。

『もう私、世間と言つたやうなものは何うでも好くなつた——』

お銀はあたりを見廻すやうにして言つた。向うから坊主の學校の裏の家に、またその裏の家からこの郊外の新しく建てた家屋に——その度毎に、ひとつひとつその身の周圍に纏り附いて來てゐるものを捨て、捨て、やつとの思ひで此處までやつて來たやうな氣がした。

『兎に角、私には私の道があるのよ。ひろい、ひろい、横みちだの、迷ひ道だの澤山あつたところをよくも踏み惑はずに此處までやつて來たと思ふのよ。それも一直線に——自分が考へても心持が好いほど一直線に……。これといふのも、先生がゐるからね。先生がゐなければかう眞直には來られなかつたかも知れない

……』お銀はしみじみした調子で母親に言った。

『お前は一體昔からさういふ風だつたよ。他がきめた道を安心して通つては行けない方だつたよ。だから、先生がゐればこそ、さういふ風に真直に來られたには來られたのだけれども、やつぱりお前の氣質にも由るんだね。いくら先生でも、お前のやうな氣質でなければ、かう真直には來られなかつたらうね……』

『それはさうね』

お銀も深く考へるやうにして、

『でも、先生に教はつたことが多いと思ふわ。さういふ意味で、私は先生こそ本當に私の先生だといふ氣がすることがあるのよ。だから二重に恩を受けてゐるといふ氣がするの……。それなのに、その先生から離れて行かうとしたことがあつたんですからね……。』昔のことを思ひ浮べながらお銀は言った。

静かな日がお銀には續いた。父親が尻端折をして花を栽ゑてゐるところに行つてじつと立つて見てゐたり、お糸が來たのを相手にのんきに半日話したり、そこらあてもなく野原を逍遙したり、志摩子や喜久子の行つてゐる學校に行つて見たり、また時には母親を誘つてその近くにある名高い古い佛像の竝べてある寺に行つて見たりした。その時母親は一つの佛像の前で急に立留つて、『よく似てるねえ！ この佛さまの顔は——』と指さして言った。

『さうねえ』

その名は言はないでも、それがすぐお銀に通じた。

『額から眼のところなんか、本當にそつくりだよ』

『本當ねえ』

母子の間にはそれ以上に何の言葉も取り交はされたのではなかつた。しかもその古い佛の顔に似た人のことが長い間——ずつとこつちに來て了ふまでつゞいて思ひ出されてゐた。それは他でもなかつた。お銀が初めて世話になつた遠山といふ人のことだつた。お銀もその人はさう憎くは思つてゐなかつたし、母親にも何處か反の合ふところがあつて非常に力にしてゐたのだつた。惜しいことには、遠山の方に多少自由にならぬところがあつて、飽きも飽かれもせず別れて了ふことになつただけれども、もう少しうまく行けば、お銀は芝あたりのある商賈の妻となつて、そのまま何の變化もない仕合せな生涯を送ることが出來たのであつた。お銀は久し振でずつと此方の方までその遠山のことを思ひ浮べつゝ歩いた。

『いつの間にか遠く歩いて行つて了ふやうなものね……』

母親はもうその時には遠山のこと何も思つてゐないので、ちよつとわかりかねたといふやうに、

『えッ！』

『いゝえ何でもないので……。いつの間にか時が經つて行つて了ふツて言つたのよ。世の中ツて不思議なものね……。』

『本當だね』

『よく先生が仰しやるけども、人間ツて、大きな川の流れの中か何かに漂つて早く早く流れて行つてゐるやうなものだと思つたのよ。遠山のことだつて、あんなことがあつたのかと思ふわ。夢のやうなものね。自分でやつたことだとは思へないのね。あの時、學校の裏の海岸に飛込まうと思つたりして……。今、考へると丸で別の人のやつたこととしきや思へないわね……。』

『さつきから考へてゐたのかえ？』

『いゝえ、さういふわけぢやないけども……。あの人もあの糸屋から貰つたお上さんが二人子供を残して死んで、あとにまたお上さんが出來たさうだけでも、震災

後は何うしたかしら？」

『あそこにはもうゐないね』

『母さん、よく知つてゐるのね』

『お前には話さなかつたけども……京橋の照が来てさう言つてゐたよ』

それきりでふたりは静かに歩いた。それは十二月にもこんな暖かな穏かな日があるかと思はせるやうな日だつた。咲きわけの山茶花が垣の中に咲いてゐるのを母親はお銀に指して見せたりした。平生はたゞ眼前のことに追はれて、自分の身のことすら振り返つて見ることが出来なかつたことなどを母親もお銀も考へた。そこからふたりは畠の中の道を歩いたりして、もう一つあたりに名高い流行佛の御堂の前に手を合せたりして、歸りにはその門前の名物の饅頭を買つて歸つた。

歸つて來ると島田が來てゐたので、お銀はその話をした。

『そいつは面白いな……』

『だつて、ねえ、おつかさん、そつくりなんですもの……。私は母さんがさういふ前から知つてゐたのよ。よく似てる佛さまがあるもんだと思つてゐたのよ。それら、昔から言つてゐるぢやないの？ 五百羅漢に行けば、大抵な人に逢へるッて……？ つまりそれなのよ……』

『さうかえ？ お前、私が教へる前から知つてゐたのかえ？』

傍から母親もその時のことを思ひ出すといふやうにして言つて、

『本當によく似てゐたねえ！』

『それぢや遠山さんに逢ひたいと思つたらすぐそこに行けば好いわけだね——』

お銀と遠山とのことは昔からよく聞いてゐるので、島田は別に何とも思つてはゐないけれども、それでもこんなことを言つて見るだけの微温はまだその心に残

つてゐた。

『さうね……。今度はあなたも伴れて行つて見せてあげませうね？』

かうしたかの女の言葉にもまたその微温が残つてゐるのだつた。島田は自分がまだ出會はさない以前のかの女の戀——おそらくかの女の初戀であつたらうと思はれる戀——その戀の微温をそこに感じて不思議な氣がした。それは口で説明しようとしてもちよつと出來ないやうな氣持だつた。

『不思議なものだな！』

暫く黙つたあとでかう島田の方から言つた。

『本當ねえ——』

その時にはお銀の心ももういつもの調子にもどつてゐた。

『私、本當のことを言つて見ませうか……。』お銀はやゝ眞顔になつて、『私、赤坂で、初めてあなたにお目にかゝつた時分には、まだその戀の創と言つたやうなも

のは治つてゐなかつたのよ。だから、私としては、あの時分は随分調子が變つてゐやしなかつたかと思ふわ。さうね、やげぢやなかつたかも知れないけども、何うせ思ふやうにならないんだから、なんだつて構ひやしないッていふ氣がしてたのね……。そしてそれをあなたが氣に入つたのね……。そら、あなただつてあの女學生の人ね。あの人から失戀して私に來たんでせう？ だから、それでいくらかお互ひに氣持が合つたのね……。』

『それはさうだ！』

『やつぱりつゞいてゐるのよ。いろんなことが！』

『だつて、遠山の奥さんになつたつてお前は幸福ぢやないよ』

母親が傍から口を入れた。

『さうかも知れないわねえ……。それは私にもわかるわ。幸福といふことはむづかしいことですよ。何んなにお金があつて、名譽があつて、不足といふ

ことは少しもなくとも、それで幸福でない人がいくらもありますからね。長い目で見てゐると何が何だかわからなくなつて了ふのね。幸福なんて、一生金の草鞋でぐるぐる廻つて探して歩いたつてとも見附からないものかも知れないのね？」

『青い鳥！ 青い鳥！』

鳥田はかねて話したことのあるメイテルリンクの『青い鳥』をそこに持ち出した。

一〇九

野は次第に寒くなつて行つた。朝毎の霜は新建の家の瓦を白くした。『寒いわね、やはり市中とは違ふわね……。今朝起きてびつくりしたのよ。おちやうづに行つて硝子戸を明けて手を洗はうとすると氷が張つてゐるぢやないの……。』こんな風にお銀は母親に話した。その癖、起きたのは九時すぎで、志摩子はもうとう

に學校に行つてゐた。

『今年は寒いよ、お前……。何しろ吹きつ晴らしなんだから……。』西風を防ぐつもりで檜の樹を二三本並べて栽ゑたけれども、とてもそんなことでは寒さを禦ぐことは出来ないといふやうに母親は言つた。それにあたりにおいてあるものが一つとして来る冬の寒さを暗示しないものはなかつた。丘のところに行くと、もはや七分通り雪に包まれた富士が眞白に朝日に閃めいてゐるのが見られた。

農夫たちももう野にはゐなかつた。收穫もあら方終つた。一番最後まで残つたものでも、二三日前に唐箕トウミを廻してゐたのを終りにして家々へと引上げてしまつた。あとは、靜かに茅葺屋根から夕炊の烟が立つばかりとなつた。

『あなた、先よりは近くなつたんですから、もつとちよいちよい、来て下さらない？ 何だか、まはりに誰もゐなくなつたせむか、さびしくつて爲方がないんですもの——』度々お銀はそんなことを言つた。鳥田は来る度毎に、いろいろなも

のを持つて来てあたりを裝飾するやうにとつとめた。紫檀の化粧棚などを買つて届けさせて、それを客間に置いたりなどした。好いものを持つて来てまた失くしたりなどするとわるいからと言つてお銀がとめたけれども、それでも島田はまた草雲くさうんの蘭などを持つて来て床に懸けた。

『これも、あの竹を描いた人と同じ人が書いたの？ あの竹の方が好かつたわねえ！』

それを眺めてお銀は言つた。

『それはさうとも……。あの竹はよかつたからな……。これは、あの竹と比べるとぐつと若い時分に描いたんだから——』

『さうなの？ 若い時なの……。道理で違ふわねえ』

この他にも現代の名高い畫家のものなどを持つて來たりした。六疊の二人の居間には、山茶花を描いたHの茶がけを持つて來てかけた。島田は尠くともそこを

自分の趣味にかなつたひとつの楽しい室にしようとしてゐた。小さな本箱を買つて來て、そこに自分の好きな本を五六冊持つて來て並べた。

借家ではそんなことをしようとする氣もなかつたけれども、兎に角自分で拵へたものだと思ふと、小さいなりに意に適したものにしようとする氣がそれとなく起つて來るらしかつた。かれは柄にない高い金を出して大きな花瓶を買つて來て、お銀にそれに菊などを生けさせたりした。

壁には小さなKの洋畫をかけた。それは紅葉をちよいと描いたやうなものだつたが、それでもかなり高い金を出さなければ買へないものだつた。『この壁とのうつりが好いだらう？ 小さいから好いちやないか。此頃はお前にも段々畫のことがわかつて來たねえ！』お銀がじつとそれに見入つてゐる傍で島田は言つた。

『何も不足はないけど……。さびしいから、ちよいちよい來て下さいよ、ね、ね、一時間でも二時間でも好い……。』かう言つたお銀の顔には戀のさびしさと言つた

やうなものが細かに微妙に刻まれてゐた。

一一〇

この郊外の生活が却つて一つの情趣をかれ等の戀愛の上に加へつつあつたことは争はれない事實だつた。向うにゐた頃とは更に一層の濃やかさを増した。と言ふよりはむしろ互ひの心を一層深くつかんだ。此方から出て行かなければ向うからも出て来ないさうした心持が此頃ほどはつきりと立證されることはなかつた。かれ等の戀心の上に郊外の寒い空氣がじつと染み込んで行くやうな氣がした。

落葉がガサガサと風に吹かれてころがつて、縁の下を通つて行く匏屑が掃除しても掃除してもそれが垣の傍などにたまふ。と、朝早く父親が起きて、掃きためたに落葉や塵埃ごみにマッチを摩ると、そこから青い黄い煙が徐かに上つた。

かと思ふと、お銀は元氣を出して、井戸流しのところに鹽を持出して、洗濯板

に着物を押しつけてごしごし洗つた。あまり一生懸命にやつて、そのため疲れて半日寝て了ふことなどもあつた。『どう？ こんな平つたい爪になつちやつた……』などと言つて、洗濯したその掌を引つくり返して見せたりした。

それでも髪は一日でもこはれたまゝにしては置かなかつた。初めはお糸の結つて貰つてゐる學校出の若い髪結の許に出かけて行つたが、何うもあまりうまくなないのであつちこつちたづねて、停車場のわきにゐる髪結の許に行つた。

何うかすると、電車から下りた島田にひたりと一緒にそつて、そこから一緒に並んで歩いて歸つて來たりした。

『今日は待つた？』

『ひとり待つた——』

島田は髪を見て、『今日のは根が少し下りすぎてゐるけども、好い恰好だね……。鬢のふくらみ加減が好い——』

『ふら……』

お銀はかう言つて、そつと手で鬢を撫で、見て、『でも、此頃は昔のやうに幅をひろく出さなくなつちやつたのよ。そら、變にかう尖るやうになつてゐるでせう……、私はあんまり好きぢやないんだけど、髪結さんで何うしてもかうしちゃうんですもの……』

『やつぱりいろいろになるね。根の上り方などもわるく高くなつたね』
で、かれ等はくつきりと晴れた午後の空氣の中にその並んだ姿をあざやかに見せて、ところどころ既に霜解けになつてゐる路を拾ふやうにして歩いた。疎らな林には日影が明るくさし込んでゐた。

お銀は髪結さんの話などをしつゝ歩を運んだ。何でもそれは震災前までは人形町あたりにゐて、かなりにお得意もあつたのだが、ついでつたりとそこにゐつて了つて、歸つて來い、歸つて來いと言はれてゐるが、今では歸る氣はないとい

ふことであつた。『それはさびしいにはさびしいですけども、のんきで好うござんすから……』さうその髪結さんは言ふのであつた。そしてさうした心持がお銀の心持とびたりと合つた。賑かなところも好いけれども、郊外の生活ものんきで好いなどふたりは話し合つた。かうした林や、野や、朝霜や、藻の流れてゐる川や、霜解道や潮の寄せるやうに裏のけやきの樹に鳴ることがらしや——さういふものゝ中に埋もれて、派手な着物や、帯や、ダイアの指環や、三味線の鳴るお座敷や、唄や、戀などを思ひ出すといふことは、何とも言はれない興味を誘はずには置かなかつた。

一一一

ある日はわるくお銀が萎れた草のやうになつてゐるのを見出した。

『何うかしたの？』

『別に何でもないのでよ……』

かうは言つたが、また自分でいろいろなことを思ひつめて、ひとりでさびしさの淵の底に墮ちてゐるのであるのが、それとわかつた。

『困るねえ』

『本當にぢき機嫌がわるくなるんでこまるんですよ』

側からお銀の母親も言つた。機嫌の好い時には、母親とつれ立つて、親類の許をおとづれたり、昔戀意にして今では無沙汰勝ちに過ぎてゐる人の許を訊ねたり、さうでなければ市中の食物の旨いところをさがして食べて歩いたり、昔父母の住んでゐたあたりをのんきに彷徨たぐひいたりして、月日を過してゐるのであつたが、何うかした拍子に、そのさびしさの淵の底に沈むと、何うにもかうにもならないやうな取越苦勞見たいなものに襲はれるのであつた。その時には島田はもう長く生きてはゐないやうに見えたとし、お銀自身にしてもいつこの世から永久に去つて

行つて了ふかわからないやうな気がするのだつた。『私が何うしたつて先きに行きますよ、成るだけ早く重荷を下してあげるわ！』こんなことを笑ひながら言つてゐる中はまだ好いが、それが段々昂じて來ると、しまひには自分がゐなくなつたあとのことなどを際限なく案じ出すのだつた。

『私、死んだあと、おとつさんやおつかさんは何うなるんでせうね？』

『また始まつたね』

『だつて、人間は結局さうなるんですもの……。それを考へると、かうしてじつとしてはゐられないやうな気がするわ。おとつさんやおつかさんを見送つて、志摩子のお婿さんでもきめて、それからあとで死にたいと思ふけども、かう弱くつては、とても私は長生は出來ないと思ふの……。ひとりですよつびてそんなことを考へて眼を明いてゐることがあるの……。昨夜も新潟で死んだ弟のことを考へて考へて、何故あんなに早く死んだらうなどと思つて、障子の明るくなるくらゐ

まで起きてゐて、それからぐつすり十時近くまで寝て了つた。あなたなどには、いくら話してきかせてもわからないでせうけども、それはたまたまなくさびしい』とお銀は言ふのだつた。島田はそこにひとりのさびしさといふものを見た。むしろひとりゐるものゝさびしさ！ 此頃では三日目に一度ぐらゐはちよつとでもやつて来るやうに島田はしてゐるけれども、それでも満ち足りないさびしさ！ つかむものをすつかりつかんで了へばすぐ満足と共に倦怠が来るもののだが、完全につかんで了ふことが出来なため何うしても免るゝことの出来ないさびしさ……志摩子の柔かい頬や、温かい肌膚や可愛い唇などでかなりはまぎらされてゐるにはゐるけれども、それでもいつか落ちて行くひとりのさびしさ！ さういふ時には、何んな亭主でも、顔を見さへすればすぐ喧嘩するやうな亭主でも、また何んなに碌でなしの亭主でも、それでもひとりきまつてゐればその方が何んなに幸福だらうと思ふのだつた。島田の行き直らないところのない戀ごゝろに對し

てはすまないけれども、それでもその方が幸福だなどと思ふのだつた。島田の話では、かの女より他に異性はないやうにいふけれども、またそれを信じないではないけれども、やつぱり家庭を全く離れて此方のものにならなければ満ち足りるゝといふことは出来ないのである。毎夜一緒に寝る志摩子の肌膚だけでは何うしても足りなかつた。

一一二

何うしてさういふ風にデリケートになつたかと思はるゝやうだつた。それにかの女の身にしては、一面かういふところもあるらしかつた。混沌とした世間にゐて、三味線と唄と酒との巴渦ウツマヒに雜り合つてゐる中は、苦勞があつても苦勞にならず、煩悶があつても煩悶にならず、刹那に流れて行つて了つたけれども——そのためわるく物事に拘泥してゐるやうなところはなく、絶えず生きて動いてゐるや

うな形であつたけれども、また一たびそこから離れて来て了つては、結局は何うにもならない沈滞の底に身を落附けなければならぬことを知らないでもなかつたけれども、しかしかういふ形で、いつの間にかその深淵に墮ちて行かうとは決して思つてゐなかつたのであつた。

いけなかつたら何うにでもなる！ さういふ例はいくらかもある。十年も間を置いて再び棲を取る身になつた人もめづらしくはない。その時はその時になつてから考へても遅くはない。かういふ心持でかの女は右へ右へと偏つて歩いて来たことを今でもはつきりと思ひ起した。否、つい此間までもさういふ心持がかなりに多くその内部を占めてゐたのは事實であるが、しかも、いつとなくそのあと戻りが、考へてゐるやうにさう容易く行はれ得るものではないといふことが深く深く考へられて来たのであつた。それは、ある時期までは、そのコムバスをぐるりと引返すことは可能であつたであらうけれども、それから一步を進めては、もう何

うしてもそれが出来なくなるものであるといふことをかの女ははつきりと知つてゐなかつたのであつた。否、そこまで行つて振返つて見て始めてその難かしいことを知つたのであつた。

さうかと言つてあとに残つた人たちをお銀は決して美ましいとは思つてゐるのではなかつた。かの女ははつきりとその自分の取つて来た路を眼の前に見た。

従つてかの女は三味線を弾かうなどといふ心持を起したことはなかつた。唄も歌はなかつた。何うかすると、ラジオで昔馴染の妓たちの小唄の放送などを聞いて、その境界が丸で別な世界でもあるかのやうに、昔こひしさの心にもえることがないでもなかつたけれども、しかも、それが長くつゞいてゐるやうなこともなく、おき、それを他にして了ふのであつた。その點ではお銀はあきらめが好かつた。母親すら驚くほどあきらめが好かつた。

『私でさへ、此の年になつても、三味線を時々持つて見たいと思ふのに、お前さ

んはよくさういふ氣が起らないね』

何うかすると、母親はお銀に向つてこんなことを言つた。

『だつておつかさんとは違つてもう倦々するほど三味線なんか弾いたんですもの……。ちつとも持ちたいなんて思ひやしないわ。面倒くさいわね、もう、三味線なんか！』

『さういふ氣持だから、洗濯なんかしてゐられるんだね』

『さうかも知れないね』

さういふことよりも、志摩子の學校での生活などの方が、餘程多くお銀の注意を惹いた。かの女はよく田舎の畠の中にあるやうな新たに建築した小學校へとその艶てやかな、あたりの眼を睜らせずには置かないやうな姿を見せて、そのかゝりの女教員に逢つて、いろいろと志摩子のことを頼んだりなどした。雨の日は大抵は父親が迎へに行くことになつてゐたが、たまにはお銀が下駄と傘とを手にし

て迎ひに出かけた。

一一三

その傘と下駄とを志摩子の許に持つて行くといふことから、話に花が咲いて、遠い昔のことなどがかれ等の間に繰返されたりした。

それは他でもなかつた。島田がよく向うにあそびに行く時分、降性であるかして、あくる日はきつと雨が降つて、下駄と傘とがいつも問題になるのであつた。その頃には自動車が今のやうに便利でもなく、また安くもなかつた。さうかと言つて腕車ではとても遠くの道を引かれて行くことが出来なかつた。『本當に厄介だなア、また雨だ。また下駄と傘だ』かう言つて、島田はよく奴傘と安足駄を買はせたものだつた。

『それは借りて行つたつて好いけどもね……。しるしがついてゐてはねえ！ す

ぐわかるからねえ』

こんなことをも島田は言った。

狭斜にあそんだりなどするものは、誰でもきつとさうした経験を持つてゐないものはないに相違なかつた。歸らうとすると、雨！ いはゆるやらすの雨！ さうかと言つて一日二日は好いにしても、いつまでも流連みつどひしてゐるわけには行かなかつた。用もたまつてゐる。女房も角を出してゐる。つとめてゐるところをあまり長く明けては、その信用にも關係する。爲方なしに買つて貰つた安足駄をはいて、油がわるくくつついて開けるのにもバリ／＼と音がするやうな傘をさして、そして泥濘の深い中を電車のあるところまで歩いて行くのだつた。島田はそれを何遍経験したか知れないのだつた。またさうした安足駄と傘とがいつも自分の下駄箱の中に幅をして並べて置かれるのだつた。

その話が今になつてまたかれ等の間に出て來た。

『先生はいつか「傘と下駄」といふ小説を書く書くつて言つていらつしたが、たうとう書きませんでしたね？』

お銀の母親は笑ひながら言つた。と、島田は笑つて、

『いや、書かないことはありませんよ。一つのものにはしなかつたけれども、長いものの中に一つの章として書いておきましたよ』

『さうですか……やつぱりお書きになりましたか？』

『本當にあの時分は、よく傘と下駄とが問題になりましたね』

お銀も傍から口を插れた。

『今でも若い人たちはきつとそれをやつてゐるんだね。自動車が便利になつたにしても、さう贅澤が出来るものばかりではないからね……。それにしても、不思議な氣がするね。その時分にはいつさうした時が經つて行くのだらう、さうしていろいろなことが解決されるだらうと思つてゐたものだが、今はもうこんなとこ

ろまで——言はばまア茄子島と言つたやうなところまで来てゐるんだからなア』

『本當ねえ』

お銀もしみじみと言つた。

『志摩子の下駄と傘とを持つて行く次手にそんなことを思ひ出すといふわけなんだからなア！ それを思ふと、いつの間にかこんなところまで來ちやつたつていふ氣がするね……？』

『でも、それは爲方がないでせう。誰だつて皆なさうなんだから……』

『それはさうさ……誰だつて皆なさうなるにはなるのサ……。不思議なもんだなア、人生といふものは。何んな榮華でも、何んな歡樂でもみんな時の間に過ぎて行つて了ふんだからな……』

外ではつめたい冬の雨がかなり音を立てて降つてゐるのだつた。

何處まで行つても、これで頂上だといふ感じはしなかつた。それからそれへと新しい世界がひらけて、心と體とは何處まで行くかわからなかつた。

死！ 結局はそこにあるらしい。そこまで行かなければ何うにもならないらしい。ある時はかれ等は話をそこまで持つて行つた。二つの心と體とがびつたりと合ふなどといふことは容易なことではない、とても出来ることではない。死！

その奥にかれ等はその神祕な境を覗いた。

『AとHとが心中した心持がよくわかるね』

『さうですね』

さうは言ふものの、それは言葉ではとてもあらはせない境だつた。かれ等は黙つて相對した。

『やつぱり十分といふことは人間には望まれないことなんですかね?』

『何うもさうらしいな……』

『その證據には死ぬことなんか何とも思はなくなりますものね……』

『僕はまた、それを深く押しつめて行くと、怖いやうな氣がする。そこから先きは、挿鉢のやうになつてゐて、するするとたわいなく引き込まれて行くやうな氣がする。恐ろしい……』

島田はかう言つたが、一步を進めて、『お前はさうは思はない……?』

『私もさう思ひますね……』

『やつぱりあまり奥まで入つて行くといふことは、さういふつもりでなくとも、ひとり手に自然を弄ぶといふやうな形になるのかも知れないな。わからないことはわからないまゝにして置かなければいけないのかも知れない……』

『……』

『やつぱりひとつの探検見たいなことになるかも知れない。命を賭さなければ、あるところから先へは入つて行くことが出来ないのかも知れない……』

『さうね』

AとHとの心中もそれだ! といふ風にかれ等は話した。無論體の一致だ!

といふ風に。その心持はその時そこに入つたものでなければ本當にはわからないかも知れないけれども、しかしかれ等の心持やら感じやらであらうそれを推察することが出来るといふ風に。AもHもその場合にはもはや命は惜しくはなかつたらうといふ風に。世界は二人きりの世界になつて、そのひとつの抱擁にあらゆるものが入つて行つて了つたであらうといふ風に。『だつてそれより外何がこの世の中にあるんでせう。それですべて満ち足りるぢやありませんか』といふ風に。『誰だつてそこまで行けば満足ぢやありませんか。そこまで行けないからこそいろいろな争ひやら不平やらが起るのぢやありませんか。そこまで行き得た人たちは仕合

せだ。行きたいからとて行けるものではない。大抵なものはそこまで行くのがむつかしいので、皆な引かへして来る……。とても行けない境だと言つて引かへして来る……。でなければ人間はそんな境まで行くべきものではない、人間は好い加減なところにとどまつてゐなければいけないと言つてそれを非難する……。しかしそこまで行けた人たちはそんな非難を考へてゐる餘地なんかはない……。』といふ風に。さうかと言つていつの間にかそこに引入られて了ふのは怖いといふ風に。あのAとHと心中した時には、何うしてそんなことをしたのだらう？ 何も死ななくつても何うにでもなりさうなものだと言つたが、それはその時分はまださうした體の感じを知らなかつたためであるといふ風に。

一一五

あらゆる障礙を排してそこまで行つたのであるから、無論愉快でなければなら

ないのに、そこに近づくにつれてかれ等は却つて一種の憂鬱を感じるやうになつて行つた。

かれ等は互ひに相憐れむといふやうな心持の徐々として起つて来るのを見た。それは佗しいとも違ふが、楽しむといふ心の容でもなかつた。暗くはないが、ぱつと明るいものでもなかつた。夕暮近い薄明るさの影に似てゐた。

『もう、今日は歸るの？』

いかにも静かな、さびしさうな調子でお銀は言つた。

『いや、まだ歸らなくつても好いんだけどね……。』

『でも、いつまで引き留めて置いても、おそくなるばかりね』

『なアに、構ひやしないよ』

また落附いて、長火鉢の傍で烟草をふかした。烟が徐かにすうと長く輪をつくつて廻つた。

『今夜は静かね……』

『さうだね』

『西風の吹く夜は、それはさびしいのよ……。さういふ晩には大抵新ちゃんに来て貰ふことにしてゐるんだけど、郊外は夜は怖いからね……』

『やつぱり都會でなくつてはさびしすぎるね』

『體からだのためにはわるいことはないんですけどもね』

何遍も何遍もした話がまたそこにくり返されるのだつた。お銀は別な急須を茶箆筒から出して、また茶を淹れかへたりなどした。

電車まで行く間の路のさびしいことなどもまた話題に上つて行つた。あの坂のところ——ちよつとの間、竹藪がまだ伐られずに残されてゐるのだが、そこを通るのがさびしいなどといふ話が出た。『でも、この頃はあの向うのところに電氣が一つついたので、大變好くはなつただけども……』かうお銀の母親が言ふと、

『でも、お糸なんかあれがついてから、かへつて、さびしくなつたつて言つてゐますよ。開なら開の方が好いつて言つてゐましたよ』などとお銀が言つた。

『さうさな……。別にさびしいッていふこともないけども、あの坂をのぼり切つて、向うの町家に取りつくと、ほつとするやうな氣がするにはするね』

時計がもはや十時を過ぎて了つてゐるので、

『ぢや、もう好いわ……。だつておそくなるもの……』

いつまで経つても際限がないといふやうにしてお銀は言つた。お銀は二疊の玄關の電氣を捻つて、そこにかけてあつたトンビを後から着せた。

『今日はもう寒いから、送つて行かないわ……』

『あゝ』

鳥田の足音が暫しの間して、小さな門のくゞりの明いてまたしまる音がした。あとはしんとなつた。お銀の頭にはそれにつゞいてその鳥田の通つて行く道——

百姓家があつたり竹藪があつたり坂があつたり、さびしい町家があつたりする道が映つた。てくてくと、その道を歩いて明るい電車の停車場へと行くかれが映つた。島田はまた島田で、お銀がもう寝ようなどと言つて、いつもの寢間着に着かへて、志摩子の寝てゐる床の中へと入つて行くさまなどを明るく電車の中で思ひ浮べた。

一一六

ある日島田が入つて来た時、お銀はそのたゞ事でない顔をすぐ見て取つた。

『何うかしましたか？』

『うむ……』

島田は煮え切らない返事をしながら、いつもの長火鉢のところに坐つた。

『何うしたんです？』

『大したことではないけれどもね……。此頃わるく常太が強情になつてね……。』
『言ふことをきかないんですか？』

お銀はいくらか張り詰めたやうな調子で島田の顔を見た。

『いや、何うも子供ツていふものは自由にならないもんだね？』

『別に、何うもしたツていふわけぢやないんですか？』

『いや、わるく喰つてかゝつて来るんだよ……。』島田はちよつと考へるやうにして、『一體、おとなしい素直な奴なんだからね。そんなわけはないんだけども……。やつぱりその仲間などに感化されてあゝいふ風になるのかな……。』

『何ツて言ふんです？』

『すつかり此方のいふことなんかきかなくなつちやつたんだ……。それは皆な父さんがわりいつて言ふんだ。父さんがさういふ風にしたんだツていふんだ。房子が變なことになつたのも、何も彼も父さんがわるいからだツて言ふんだ……。今

まではおとなしくしてゐたけれど、もうさうしてはゐられなくなつたツていふんだ……』

『まア……』

お銀は半ばあきれたやうに半ば案じるやうに言つた。

『何うも不思議なんだよ、そんなことを言ふ質ぢやなかつたがな……。やつぱり學校などでそんなことを皆なして言つてゐると見えるんだ……。やれ親父なんか舊式だとか、新しい文學をやるものが、そんなものに支配されてゐてはだめだとか、もう少し自由に勇敢に出て行く必要があるとか、さういふことを常に言つてゐるらしいんだ……。僕なんか、何方かと言へば干渉しない、何でも子供に自由にさせて置く好い爺の方なんだがな……』

『さうですとも……。あなたなんか、ちつとも難かしい父親ぢやないと思ふんだけども……』

『何うかしたの?』

向うにゐた母親はそれを小耳に挟んだといふやうにして問うた。

『いゝえ、ね、常太さんが言ふことをきかないんですとさ……』

『それはさうでせうよ……。もういくつになつたんです?』

『二十四ですかね?』

『それぢや、もうそのくらゐのことは言ひますとも……。親の眼ではまだほんの子供ぐらゐに思つてお出でになつても、二十四ツて言へば、もう立派な大人ですからね……。ちつとは大目に見てあげなくつてはいけませんね……』

『それはさうよ……。』お銀もそれに同意するやうに、『あんまり子供にしておきすぎるとぢやない?』

『そんなことはないつもりなんだがな……。小遣だつて十分にやつてあるし、本だつて欲しいものは何でも買つてやるし、不足はない筈なんだけども……。何うも

變だよ、急に金のことなんかばかり言ふやうになつてね……思ふやうにならないもんだな……あんな風な男になるとは、ちつとも思つてゐなかつたんだがな？」

『でも、學校は出来るんでせう？』

『それも何うだかな』

半ば嘆息するやうに島田は言ふのだつた。

一一七

島田は深い感慨に堪へないやうに、

『つくづく人間といふものは思ふやうにならないものだと思ふね。僕なんかは親と子との心持の違ふことなどはよく知つてゐるし、何んなことでも理解するだけの用意は平生持つてゐるんだけど……それがうまく行かないんだからね……』
『やつぱり早く家庭を持たせる方が好いんぢやない？』

お銀にもそれがかなり大きな心配になるのだつた。

『でも、まだ學校を卒業しないんだからな……卒業もしない中に、さういふことを考へるといふことは、學生としても變なことなんだし……そんなところまで入つて行つて、あまり親馬鹿といふ風に他に言はれたくないからな……』

『卒業はいつ？ もうぢきなんぢやないですか？』

『來年の四月だよ』

『それぢやもうぢきぢやありませんか。それまでソツとして置く方が好いのね。學校さへ卒業すれば、何うにでもなるわけですからね』

『ところが、それが出来るか何うか疑問だな……』

島田はわるく悲觀したやうな調子で、『やつぱり僕なんかには家庭といふことがうまくやつて行けないのだ……。家庭をやつて行くには、何うしたつてもう少し世間的でなくつてはならないからな……。つくづく僕も家庭といふものを持って餘

して了つた!』

お銀にはそれが軽く聞き流せなかつた。ひとり手に自分の生活についで來てゐるやうな氣がした。かの女はだまつて了つた。

ゆるゆるした感傷的な調子で島田は猶ほつゞけた。『昔の人が言つた言葉の中に親の子に對する悲しみを焼野の雉子夜キジノヨの鶴といふ風に言つてゐるが、そんなことは非常に古い舊式な、今では通用しないものぐらゐに人も言ひ自分も思つてゐたがね。それが、今時分になつてから——五十六七にもなつてから、かういふ風に強局的確に襲つて來ようなどは夢にも思はなかつたね……。人間はいくつになつたつて、一寸先きはわかりやしない、何があるかわかりやしない……。年を取つたり経験を積んだりして、何でもわかるやうな顔をしてゐたのが、自分でもはづかしいくらゐだ……。實際、今、さういふものが自分の前に待つてゐようとは思はなかつたよ』

『でも、まだそんなに失望しなかつて好いんぢやないんですか?』

『いや、もう駄目だ……。あんな風になつちやダメだ……。』

『亂暴でもするんですか?』

『いや、そつとして置けば、亂暴なんかしないけども、少し人間並に扱つて小言でも言ふと、すぐ反抗して來るんだからね……。何うも普通ぢやない……。』

『困つたことが出來たわね……。』

お銀にしても、お銀の母親にしても、さう言ふより外に慰めやうがなかつた。それに、一步を進めて入つて行けば、そこにかれ等の生活がつづいてゐた。(それ、私たちのやうなものがぶら下つてゐるんですから……。だから困るわねえ)と言ひたいにも、さう一度言つて了へば再びその言葉を引込めることが出來ないので、つい口まで出かゝつて來るのをお銀は強ひて押へた。お銀にも思ひがけない災難がその傍近く押寄せて來たやうな氣がした。

先生はさぞ困つてゐるだらう。あんなに可愛がつて、小さい時から旅になど伴れて行つたりして、何うかしてその跡つきにしたいとしてゐたのに、何うしてさう物事は旨く行かないのだらう。先生なんか、そんな酬いを受けるやうなことは爪の垢ほどもしてゐないのに、何んな好い酬いを受けても受けすぎるといふことはないほど好く出来た人なのに——かう思ふとお銀は眠つても眠られないやうな氣がするのだつた。それに、いつもなら、『他のことをモデルにしたりして一生を送つて来たんだから、何うせ祿なことはないよ』とか何とか軽く笑ひながら言ふのだけれど、それさへ出ずにしよげ切つてゐるだけに一層それが心配になつた。

『おばアさん——』

床を並べた母親がやつぱりまだ眠られずにゐるらしいのにお銀は聲をかけた。

『えッ』

『何でもないけどもね、何うして常太さん、そんなになつたんでせうね?』

『本當だね……。やつぱり何も不足のないところには、さういふことが起つて來るものかも知れないね……。そら、あの品川にゐた時分、お寺の息子があまり學問をしすぎて、少し氣が變になつたのがゐたねえ……。お前知つてゐるだらう?』

『あ、知つてゐる……。髪を長くして、ゆつたりゆつたり通りを歩いてゐたりなんかしたね? しかし常太さんのは、あんなにひどいんぢやないんでせう?』

『さアね。さうなら好いけれどもね……。あの病氣は何うにも治しやうがないもんだからね……。』

ふたりはかう言つたきりでびたりと黙つた。志摩子はいくらからかうつぶし加減に静な軀を立てて眠つてゐた。外では風がかなり強く樹に鳴つてゐるのが聞えた。『思ふやうにならないものだね?』

お銀はシミジミ言つた。

と、母親は急に、

『それもさうだけでも、お前の病氣は何うだえ？ 何だかこの頃少し變つちやゐないかえ？』

『それもあるわねえ——』

お銀はまた溜息を吐くのだった。

『お前、無理をしてはだめだよ……。何だか、ぢき癪見たいなものが起つて来るやうぢやないか。あんまり軀をつかつちや駄目だよ』

『でもねえ——』

お銀はあとを言はなかつた。

『やつぱり、身體が元手見たいなものだからね。無理をしてはダメだよ。軀が亡くなつては、元も子もなくなつて了ふわけだからね。今度一度醫者に行つて見て

貰つたら何う？』

『さうも思つてゐるけれども……行つて見て貰へば、手術をする方が好いと言はれるのにきまつてゐるんだから……』

『それはさうだらうけどもね、時々見て貰つて置くほうが好いよ。知らん顔をして、放つたらかして置いて、もうダメだなどと言はれると、それこそ取つてかへしがつかなくなるから……。何うも此頃あまり好いやうに見えないねえ！』

『いくらか大きくなつたやうな氣がするにはするね』

『だからサ』

母親は壓しつけるやうに言つた。

お銀は神経性の蒼白い顔を夜の空氣の中にくつきりと見せて、それを手にしては征々眠られなくなると思ひながら、枕元に置いてある巻煙草を一本取つてそれにマッチを磨つた。

その病氣については、もはや七八年も苦しんで来てゐるのだつた。時には一大事でもあるやうに、それからそれへと醫者をかへて見たり、レントゲンをかけて見たり、また時にはある人の言葉を信じてかの女に似つかはしくない大きな灸點を體のあちこちにすゑたりなどした。『だめだらう？ そんなことをしたつて？ やつぱり姑息なことをせず、手術をした方が好いだらう？』かう島田が言ふと『さうね、私もさう思ふんです……。ぐづぐづしてもう何うにもならないやうになつてからではしやうがありませんからね』といつもお銀は言ふのであつたけれども、それでもいざとなると、それが容易に斷行が出来ないらしかつた。『おつかさんはかう言ふんです。それは手術はやるならやつても好いだらうけども、それにはよくよく注意して、大丈夫だ！』といふ見きはめがついてからしておくれ。

お前にもしものことでもあられやうもんなら、それこそ私たちは乾ぼしになつてしまふからねツて言ふんです……。おつかさんやおとつさんの身になればもつともなんです……。それに、今、手術をしなければ、目に立つていけなくなるとか何とか言ふのならそんなことは言つてゐられませんが、別にさういふわけでもないんですからね……。わたしも、もう少しあつちこつちきいて見たり何かして何うしてもする方が好いといふことになれば、一番好い醫者に刀を執つて貰ふつもりです』かう言ふのを島田もたつてといふわけには行かないので、そのままにしてつと今日までつゞいて来てゐるのだつた。

生中にさう慌てなくつても好い病氣であるだけに、その日ぐらしといふ風で、何ぞと云つてはその話になつて行くのだけれども、しかも何方つかずにぐづぐづになつて了ふやうなことが多くて過ぎた。その癖その病氣の話についてはかなりに神経過敏で、癌の話などを聞いてもすぐそれを自分の方へと持つて来て、自分

のも實はその不治の病ではないか。醫者がたまさかに間違つてさう言つてゐるのではないか。その身も半年ぐらゐの中にもうこの地上のものではなくなつてゐるのではないか。ことにいつだつたか、雷門の前の小さな鮫屋の四十二三の上さんが——何う見てもそんなことはありさうにも思へないほど血色も好ければ肥つてもゐる上さんが、『もう、私この十二月一杯生きてゐるか何うかわかならぬのですからね——』かう言つてうそのやうに莞爾しながら立働いてゐるのを見た時には、お銀は他事ではないやうな氣がして、まじめな表情をして、そして烏田に話すのだつた。

『オ、その肥つた上さん!』

烏田もその人を知つてゐた。

『それも平氣で、他のことでも言つてゐるやうな調子で言つてゐるんぢやありませんか。お上さん、じやうだん言つちやいけないよ。それは他のことなの?』

私が言ふと、奥さん、本當にさうなんですよ、もう今年きりの命なんですツて? やつぱり癡なのね。怖いわねえ!』

それから暫くしてから、また、その話が出て、『あの上さん、その後何うしたらう?』と烏田がきくと、『もうとうにゐないわ……。やつぱり死んだんですツて! 私、此間きいたわ。人間の命ツていふもの、をかしなものね。私、あれを考へると、今でもあの上さんがにこにこ笑ひながら言つてゐたのが眼に見えるやうな氣がして爲方がないんですの……』とお銀が言ふのだつた。

一一〇

しかし結局は何うにもせず、その日暮しに年月が經つて行つたのであつた。勿論烏田にしても、お銀の母親にしても、それを心配しないではなかつた。何ぞと言つてはすぐそれを持ち出した。

『でも何でもなしに十年も二十年も生きてゐる人もあるんださうですからね。氣にもなりもしないものをそんなに氣にすることもないのね。却つて氣にして、しなくつても好い手術をして、あとがよくなつて死んだ人もあるんですからね』
さう偏つて考へるやうになると、却つてさういふ例が有效にお銀の許にあつまつて行くといふ形になるのだつた。

『お前がそのつもりなら、それでも好いけれどもね』

『でも氣にはなるのよ。さうね、忘れてゐることもあるにはあるけれども、いつでもそこに行つて打突かつて、いやアな心持になるのよ。やつぱりそのために、はめを外してのんきにあそんだりするやうな氣分にはなれないのね』

島田は時にはその好加減なのを責めて、『だから、日本の女はダメなんだ。勇氣がないからな。ベストを盡してそれでいけないのなら、何うもしかたがないぢやないか。それも醫者が保證は出來ないと二の足を踏んでゐるのなら、たつてした

ら好いだらうとは勸めないけれど、現に醫者が何でもない、いくらも治る、あなたくらゐの中なら、十人が九人治るツていふんだから、思ひ切つてした方が好いと思ふんだがな』と言ふことがあると、お銀はその時はその氣になつて、『さうね、今日の外科のお醫者なら信じて好いんですからね。その中、するわ。二三軒診察して貰つて……』かういふのであるけれども、やつぱり第三者の傍から見ても言ふことゝそれに正面にぶつゝかつてゐるものとは、何うしても考へが合はぬらしく、何ぞと言つては引込思案になつて行つて了ふらしかつた。ある時はお銀は何處からか白藤の枝についた瘤が瘡やさうした病氣に特效があるといふことをきいて來て、それを夢中になつて捜し廻つたことなどもあつた。かの女は他の顔を見る度にその白藤の瘤が何處かにないかと訊ねた。そのためには少しくらゐる金を出しても好いなど言つた。しかも白藤の瘤は容易になかつた。かの女はある人が少しばかり持つて來て呉れたのを十日ほど服用したら、非常に結果が好かつ

たといふので、一層それに対する渴望を増したが、やはり十分にそれを手にすることが出来なかつた。ところがそれは震災の二三年前のことだつたと思ふが、鳥田はお銀とお銀の母親と三人して、新吾とお糸が大阪に其時分つとめてゐたのをたづねて、あちこちを見物して廻つたことがあつた。その時だつた。長谷の観音にお詣りして、あの石段の數などを數へたりしてのぼつて行つたが、ひよつくりそこに、その本堂の傍のところに、小さい池があつて、そこに藤棚が吊つてあるのをお銀は發見した。『あ、白藤！』かの女はかう叫んだが、それと同時に、そこにその數百年を閲したらしい太い藤の蔓に、その一生懸命になつてさがしてゐる瘤が固まつてくつついてゐるのを發見したのであつた。鳥田はそれを取つてやつた。わけなく取れた。お銀はそれを何んなに喜んだか知れなかつた。それは尠くとも観音様の御利益だと言つた。そしてかの女は一年も二年もそれを服用した。

一一一

しかしその白藤の瘤も果してよく效いたのか何うかわからなかつた。いつの間にかその服用も忘れた。それはをりをり氣にはなるにはなるが、別にたぎつてわるくなるといふのでもないので、いつか馴れつこになつて、少しぐらゐ胸がさし込んで來たり氣持がわるかつたり疲れたりしても、始めのやうにさう大して心配もしなくなつた。『何うせ、これが私の命とりになるのかも知れないけども十年も生きたことなら、死んだつてさう惜しくはないわ……。今さへ死ななければ！』こんなことを言つて過ぎて行くやうな月日が積つて行つた。

やはり向うにゐる時分その同じ病氣で死んだ小萬といふ藝者のことなどををりをりはかれ等の話題に上つた。それはお銀の友だちと言ふ程ではなかつたけれども、ちぎ近くに住んでゐたので、何ぞと言つてはよく往つたり來たりした。それ

はお銀のとは違つて、二三年の中に忽ち大きくなつて行つたやうなものだつた、見る見るその體は衰へて行つた。『お前さん、放つて置いて好いの』心配してお銀がさう言ふと、『だつて、しやうがないぢやないの……。こんなになつて了つたんですもの……。手術したつて、もう駄目だつて言ふんですもの……。』お腹では平氣でもないのだらうが、そんな風にのんきな調子で小萬は言つた。そして震災の年の春に忽ち死んで行つて了つた。『でも、私なんかは好いのよ。ちつとも大きくならない方なんですもの……。小萬ちゃんのは丸でたちが違ふんですもの』お銀は死ぬほど自脈を取つてゐるのだけでも、それでも表面はそんなことを言つて自ら慰めて來た。

概して、あまり働いたりあまり遠路とほみちを歩いたりすると後の具合がわるかつた。『あとが怖いから、私行くのは止すわ』旅に誘はれて、かう言つてことわることもなども度々あつた。『もう何にも心配はないけれども、たゞそれだけが瑕ね……。もしこれがひとり手に溶けるやうになくなつたら、何んなにうれしいでせうね。』

私、時々何うかするとさういふ夢を見るのよ。解けるやうにその塊がなくなつて了つたツて喜んでゐると、それが夢でがつかりすることがよくあるのよ』かういふことを話してきかせるのも決して稀ではなかつた。

母親にも父親にも、常にそれが問題になつてゐた。家屋をたてる時にも、だから、その方が大きな問題ではないかと母親は言つたのだつた。しかしまた一方から言へば、そんなことを考へてゐた日にはいつになつたつて家なんか出來やしな……。何うせ人間は死んでから金は持つて行かれないのだから、今の内建てられるものなら建てる方が好いといふ、幾らかやけに近いやうな心持も手傳つたのであつた。お銀がだまつて坐つてゐたりすると母親は心配した。またむやみに先きに立つて洗濯などに夢中になつてゐる時にも心配した。體の具合が細かにその行動に影響して行くらしいのが、一緒にゐるだけに、親子であるだけに、母親にはことによくわかつた。さういふ時には、お銀は理由もないのに志摩子を叱つたり、

母親にわるく喰つてかゝつていつたりした。この間、島田が常太のことを話して歸つて行つたあとでは『たうとう来る来ると思つてゐたものが来たやうな氣がする……。おつかさんはさう思はない……。先生の身のまはりにさういふことが来れば、私たちが考へて見なければならぬわねえ！』しかし何う考へて見るべきかはお銀にもお銀の母親にも見當がつかないのだつた。

一一三

『そんなに重荷にしないでも、その中私が死んであげますよ……。』お銀はいつも何ぞと言ふと、そんなことを島田に言つた。それはそこから續いて來てゐるのだつた。ある時は、『さうね、何うせ私は一緒に行けやしないんだ……。だから、私が死んでから行つて下さいよ。さうすれば、あなただつて思ひ残りがなくつて好いでせう』などと言つた。しかも一面さうした病人らしいところがからみつくやう

にかれの戀心を惹いた。

『私、死んだら何うなるでせう？』

『別に、何うもならないだらう？　しかし、そんなことを今から言ふのは早すぎるぢやないか？』

『でも、さういふ氣がして爲方がないんですもの……。でも、私が死んだあとでも、あなたがゐるから安心はしてるのよ。父さんだつて母さんだつて、路頭に迷ふやうなことはないでせうからね……。志摩子のことだつて、よく見て下さるでせうから』何うかすると涙を眼に一杯ためてゐたりなどした。さういふ時には、島田はしつかりとつかまへて——誰が來て伴れて行かうとしてもしつかりとつかまへて、その涙でも何でも啜つてやりたいといふやうな痴情にもえた。従つて島田にしても、その手術は勸めては見るが、やつぱりいざとなると親たちと同じやうに二の足を踏むのだつた。かれはをりをりその状態を頭に描いた。静かな病院。長

い廊下がくるりと日本間と洋間とを取巻いてゐるやうな病院。そこにかの女が髪を束ねたまゝで蒼白い美しい顔をして、患者を運ぶ車の響も音も立てずにちつと寄つて来るのを待つてゐる。その傍にかれが立つてゐる。かれもかの女が感ずると同じやうな體のふるへを感じてゐる。冷たい空氣。何か嚴かなものにでも面したやうなつめたい空氣。そこに車が靜かに寄つて来る。お銀はさびしく笑ひながら、しかも運命の車にでも誘はれるやうに、徐かに、わびしさうに、從順に、それに仰向に乗る。車を押して來た白衣の看護婦が何か二言三語低い聲で注意をあたへる。車は徐かにその長い廊下を動いて行く。その後からついて行くと、そのお銀の束ねた髪の白く微かに動くのが眼に入る。で、音もせずとその車はつめたい大理石の手術臺のある綺麗に掃除された一室へと入つて行く。

その一室！ それがはつきりとかれに見えた。氣味がわるいくらゐるに綺麗にされたその室。そこに秩序よく並べられてある寢臺。キラキラとつめたく光る手術

の器。小刀、鋏、かみそり——とてもかれは見えてゐられないに相違なかつた。證人として是非その傍に立つて、その腹部の開かれるのを見てゐなくてはいけないと言はれても、それでもとてもそこに立つて見てゐることは出来ないに相違なかつた。『あなたが傍に立つてゐて下さると思へば心丈夫ですから、その時はきつと立つてゐて下さい。ね、ね』かう平生お銀から言はれてゐたにしても、とてもそれを目にして立つてゐるに堪へないのに相違なかつた。恐らくその時はそつとその室の扉をあけてそして外に出て行つて了ふだらう。そしてその廊下でほつとため息をつくだらう。否、一度はさうしてほつと溜息をついても、それが氣になつて、ゐても立つてもゐられないだらう。廊下を行つたり來たりするだらう。生きた氣はしないだらう。

おそらく、その時は生きて空がないであらう。ゐても立つてもゐられないだらう。それも短い時間ですめばまだ好いが、二十分、三十分、一時間——もつと長くその廊下に立つてゐなければならなかつたら何うだらう。しかもその時間が治療への時間と同時に死への時間だつたら？

島田は何うした聯想か知らないけれど、それを思ふと、それと同時に鳳仙花の赤く白く咲いてゐる庭がそこにはつきりとあらはれて見えて來るのだつた。そしてその赤い白い花にかれの苦しみと悶えと戀しさとがじつと染みて泥ドロんで行くのだつた。かれはそこに死の象徴見たいなものを感じた。

やがて後で扉が靜かに開いた。そこから母親が顔を出した……。父親が顔を出した……。蒼白い心配さうな顔——その結果をきいたところで何うにもならないやうな顔。

やつとそこからその車が押されて出て來たかと思ふと、そこにはまだ意識を恢

復しないかの女が仰向けに徐かに寢てゐる。蒼白い顔をして寢てゐる。不吉な考へが忽ち島田の胸を捉へた。もしこれで再び覺めなかつたら！ 再びあの眼を明けなかつたら！ あの白い肌肌に温かさがもどつて來なかつたら！ かれはそれから先きは想像するのにも堪へないやうな氣がした。

ある時その話をすると、

『本當にさうかしら？』

お銀は笑つて言つた。

『それは本當かう、かわからない、まだやつたことではないから……』

『存外、先生なんか平氣でせう。重荷が下りてせいせいするでせう？』

『さういふだけ、お前に情がないといふわけだね？』

『さうかしら？ だつて、そんな美しい情なんて、想像では出來ても本當には望めないことですもの……』

『さうかな』

『それはあなただつて、お墓にお詣りぐらゐはして呉れるわ。それはわかるわ。しかし重荷を下したやうな氣はきつとするわね……。そして二三年経てばどうなるかわからないわ』

『誰か相手でも出来るといふんだね？』

お銀は笑つて、『だつて、あなたまだひとりではゐられないわね』

『そんなことはないな……』

『それはダメ……。いくら今誓つて見たつてダメ……。わたしがゐなくなつて見なけりや——』

お互に心配してゐることでも、終にはこんなことを言つて笑ふのだつた。人間はさう苦勞ばかりはしてゐられない。また悲しんでばかりはゐられない。もう死ぬことはわかつてゐても、それでも一日に二度や三度は笑はずにはゐられないも

のだつた。

『それでも、もう澤山だ！ ツていふ氣はするでせう？』

『お前が？』

『さう……』

『さういふ氣はしないね。やつぱりしつかりとつかんでゐたいね。死ぬまで……。いや死んでからも——』

『あなたも随分ものずきね？』

『何うして？』

『だつて、私、さつき鏡の前に坐つて、つくづくさう思ひましたもの。何うしてこんな女を先生は倦きないんだらうツて。ちつとも好い女でなんかありやしない——かう獨語を言つてゐたのよ。そしておつかさんに、お前何を言つてゐるんだい——ツて言はれたんですもの』

またある時には、島田は好い病院を見つけたなどと言つてその話をした。

『あそこなら、院長だつてオオソリテイだし……。それに、病室の具合が好い。あそこなら静かに落附けると思ふんだがな——』

『何處ですつて？ それは？』

『麴町のあの番町の向うの方なんだけども……』

『何うして御存じ？』

『いゝえ、友人の細君がね、やつぱりお前の病氣と同じでね……。長年厄介にしてゐたが、思ひ切つて、そこでやつたんだよ……』

『それで結果は好いの？』

『何でもなかつたつて言つてゐたよ。これで治るんなら、早くやれば好かつたつ

て言つてゐたよ』

『ところが、その時は何うやらからやらすんでも、あとがいけないのがあるのね。そのため死ぬのもあるのね……』

一方ではさうして手術して了つた人が美しいと共に、一方では出来ることなら手術をせずにこのまゝ固まつてくれれば好いとお銀は思ふのだつた。

『一週間ぐらゐ、ちよつとも身動きが出来ないんでせう？』

『それでもそんなに困つたやうな風でもなかつたよ。にこにこしてゐたよ』

『さう……』

お銀は美ましさうに、

『わたしもその中するわ』

『その方が好いと思ふな……。あんなに簡単に出来るんなら、何も億劫にしてゐることはないからな……』

『本當ね……それで何處んところですッて？ 九段の下？ やつぱり震災には焼け
たところね？』

『バラックはバラックだけどもね』

『そんな病院があつたことを私はきけませんでしたがね』

『しかしYッて言へば、婦人科では大家だからね。それに、氣に入つたのは、普
通の病院と違つて静かで好いんだよ。中庭なんかあつて、草花が栽ゑてある。そ
れに樹のかけも割合に多い。第一、看護婦がガサガサしてゐない……』

『さう、それは好いわね……。私考へて見て一度そこで見て貰ふわ』

島田はその友だちの細君を見舞つた時にも、そこにお銀を置いて見て考へたの
であつた。手術の時はそれは心配には違ひないが、それも一時で——うまくそれ
さへすめば、あとはその細君と同じやうに、いかにも重荷でも下したやうにこ
にこしてゐられるのだつた。そして一日は一日とよくなる。かれが毎日のやうに

そこに見舞に行く、看護婦たちも後にはそれと知つて、『あゝあの肥つた方が旦那
さんですか』などといふ。その時には何んなに好いだらう。何んなに氣持がさば
さばするだらう。それこそ本當に何のこだはりもない、かの女の笑顔が見られる
だらう。二人とも生きかへつたやうな心持がするだらう。それこそ新しい紅い白
い鳳仙花が咲くだらう。

『院長さん、まだそんなに年を取つてゐないんでせう？』

『まだ四十五六ぐらゐだよ』

『それぢや盛りね』

明日にも見て貰つて、場合によつたら明後日あたりからでも入院しようとして
その時も言つてゐたのであつたが、しかも一日経ち二日経つても、お銀はその身
體を心と共に起さうとはせぬのだつた。

『もう少し考へさせて下さい……』その次ぎ行つた時にはお銀はかう言つてまた

二の足を踏むやうな態度を取つた。

一一五

長く病んで来たその病氣が、此頃また特別にわるくなつて来たといふではないが、何處となく母親には氣になつた。

母親はじつとお銀を見詰めてゐたりなどした。

『わたしたちは、もう長いことはないのですから、何うなつたつて構ひませんけれども、若いものはなるだけ長生きをする方が好いんですから』

母親にしても、郊外に移つてから、めつきり年を取つた。もはや向うにゐた時分のやうな元氣はなかつた。ぼんやり縁側のところに坐つてゐたりした。

お銀は自分のことよりも島田のことを心配した。

『お前、何うかしてゐるね？ 今日は何？』

『さう見えて？』

『だつて、何か物が手につかないやうぢやないか？』

『だつて、夢見がわるいんですもの……。おつかさんに話すと、また始まつたと思はれるから話さなかつたけれども——今朝起きるときから變なのよ』

『また金魚の夢でも見たんぢやない……』

『そんななら好いけども、先生がこまつた顔をして、腕をかういふ風に組んで……。』お銀はその真似をして見せて、『かういふ風にして、今度ぐらゐ困つたことはないつて言つてゐるのよ。常太さんがまたわるいんぢやないかと思つて？』

『そんなに傍で心配したつて、何うにもなりやしない……』

『それはさうだけでも……。あの病氣でもおとなしいのもあるけれども、ひどいになると、何をするかわかりやしないからね。火なんかつけるのさへあるつていふぢやないの？ それを考へると、いつ何をされてゐるかわからないやうな氣が

するのよ……。先生ッていふ人は、何んなに困つても、口に出して困つたなんて言ふ方ぢやないんですからね……。だまつているんなことをずんずんして行くやうな方なんですからね……。だから本當に心配になるのよ。私なんかぶら下つてゐるばかりが能ぢやないッていふ氣がしてしやうがないのよ』

『だつて爲方がない……。』

『それは、そのために何うの彼うのッていふわけぢやないんでせうけども……。すまないと思ふのよ』

『こまるね、本當に……。お前の方だつて心配なんだし……。』

『私はもうしやうがないのよ。これから十年ぐらゐ大丈夫なら、それでもう結構なんだから……。さうすれば、おぢいさんやおばアさんだつて片附くし、志摩子だつて二十ちかくなるし……。』

『そんなことを言ふけども、それまでに私たちがうまく片附くか何うかわかりや

しないよ。壽命だからね……。』

『それはさうよ……。たゞさう考へて見ただけよ。想像よ。さう言へば、私の壽命だつて、もつと長く長く生きるかも知れない。ま、あの時分から心配してゐたけれども、別に何うでもなしに、八十まで生きたよ。もうこの世にはのぞみがないよなどといふ頃まで生きてゐるかも知れない。まあ、そんなことは望まないけれど——話だけでも、さうして生きてゐたら面白いだうと思ふわ。私が八十になると、志摩子は五十になるわよ』われながら馬鹿々々しい想像だなどと思ひながら、それでもお銀はずつと長く——その時になつてももつと長くつゞいて行つてゐる世の中を眼の前に浮べて見た。

一一六

『私、あなたにきいていたゞきたいことがあるんだけれど……。』

さう言ひかけたお銀の聲はいつもと違つてまじめな響きを持つてゐたので、外を見てゐた眼を轉じて島田はこつちへとその顔を向けた。

『……………』

『他ではないんですけどもね……………わたしもう一度向うへもどらうかと思つてゐるんですけど？』

『……………』

『誤解しちやあいやですよ……………私昨夜一晩寢ずに考へたんですけども、どうもその方が好いと思ふの……………。私やつぱりあそこで働いてゐる方が本當だと思つたんですの』

『何うして？』

『だつて、先生にばかり縋りついてゐるのはつくづく本當ぢやないと思つたんですの……………。さうかと言つて誤解して下すつちやいやよ。もうそんなつもりぢやな

いんですから……………。先生だつて、年は取つて來るし、爲事もお出來にならなくなるし、それも、常太さんのことでもなけりやまだ好いんですけれども……………それだつて、これからいつ治まるツていふあてがないんですからね……………。だから、いつまでも私がかうして縋つてゐるといふことは重荷を一層重くするばかりだといふ風に昨夜一睡もせず考へちやつたんです……………。私はもうお座敷には出ないつもりですけどもね。藝者でも二三人置けば何うにかやつて行けますからね……………』

『そんなことは好いよ』

『好いたつて、それぢや私、氣がすまない。おつかさんにも話して見たんですけども、そのくらゐのことなら、先生にお世話にならなくつても出來ないことはないつて言ひますからね』

『折角、家まで造つたんぢやないか。そんなことは大丈夫だよ』

『それはさうですけどもね……………考へると……………』急にお銀は悲しくなつたといふや

うに、^{みなぎ}漲り落ちて来る涙を袖で拭いて、『何うしてかう先生にはいろんなことがあるんでせうね？ 誰か先生のことでも呪つてゐるやうなものでもあるんぢやないんですかね。先生なんかにさういふわるいことが起つて来るわけがないんですけどもね』

『まア、好いよ、そんなこと！ さういふ風にお前が思つてくれるのはうれしいけれども、まだそんなに困りやしないからね。それほどまでにして貰はなくとも好いんだよ……。何うせ、人間は死ぬまで働かなくてはならないんだからな、樂をしようと思ふのは、さう思ふ方が間違つてゐるんだからな。だからその時はさう言ふよ。それからさういふことを考へて呉れてもおそくはないんだよ……。』

『それはさうでせうけどもね？』

『常太のことだつて、それは一時は大打撃のやうに思つたけれども——さういふものだと思へば、何もそんなに大問題にしなくつたつて好いんだからな……。つ

まり僕さへ働いてゐれば好いんだ……。さうすれば、萬事うまくおさまつて行くんだ。だからそんなことを心配しなくつても好いよ。しかし、かうやつてゐるのもさびしいから向うに行つて、また抱妓^{かへ}でも置かうつていふんなら、それはそれでまたおのづから別問題だよ。それなら、僕は始めからさうする方がよくはないかツて言つてゐるくらゐなんだから、賛成しないことはないよ』

『いゝえ、さういふんぢやないんです……。』お銀は頭を振るやうにして言つた。

一一七

『さうね……。私の體も心配にはなるんですけれど、やつぱり思ふやうにならな
いんですの……。思ひきつてやつてしまひませうかね？』

いつでもさう思ふのだが、現に明日こそ起きたらきつと行かうと思つて寝るのだが。——朝になるともはやその心は薄くなつてゐて、また一日そのまゝで暮し

て了ふといふのであつた。同じことを考へて、同じ日を送つて、そして同じ夜になる。『本當にその日ぐらしよ、いつからこんなになつたと思ふと悲しくなる……。それから比べると、お金のないその日ぐらしの方がまだぐつと樂だと思ふわねえ……。お金のない方のその日ぐらしなら、いかやうにも稼いでその日を送るといふ楽しみもあるけれども、私のやうなその日ぐらしはさういふ楽しみすらないんですからね……。だから、さつきの話も、あなたに縋るまいといふお腹もあるにはあるんですけども、さうしたら、いくらかその心もまぎれるかも知れないと思つたんですよ……。』などとお銀は續けた。

『思ふやうに行かないものだね』
『本當ね』

結局はその言葉で盡きるのだつた。互に深く心を合はせても、外から來るもの力は何うにもならなかつた。戀愛の破綻などといふことも、多くはその外から

來るものゝ脅威とか影響とかによるものらしかつた。何んなに堅く結び附いてゐても、何等かの力のほぐれ方で、それがばらばらになつて行くまいものでもなかつた。それは何のことはない、要のところを通した糸がちよつと切れたために、扇がばらばらになつて行くやうに――。

『でも、さういふことはないつもりだがな』

『それはさうよ、私だつて危ツかしいなんて思ひはしないのよ。たゞさういふ氣がするだけですよ』

『しかし行くところまで行つて見るつもりなんだからね』

『それはさうよ』

『何物にも壞されずに此處まで來たんだからね……。まだ容易には壞されるやうなことはないやしないよ』

『常太さん、それで、何うにもならないんですか？』

『いや、いろんな方法は取つてゐるんだよ。決して放つて置くといふわけぢやないんだよ』

『困るでせうねえ』

『困つても何うもしやうがない……。人間のベストを盡しても、何うにもならな
いんだからな……。』

『私、此間こんなことを考へたんですがね？』お銀は言ひかけてよして、『しか
し、言ふの、よさうかしら？』

『言つてごらん！』

『まア、よしませう』

『なんだえ？ 一體？』

『私、こんなこと考へたのよ……。』ちよつと考へるやうにして、『私たちがかうし
てゐることがわるいんぢやないかしら？ やめたら好いんぢやないかしら？』

島田の顔を見て、『さうしたら、常太さんの病氣も私の病氣も治るんぢやないか
しら？』

『馬鹿だな……。』

『……。』お銀は言ひかけたのをよして了つた。

一一八

『此の前にも、さういふことを度々言つたぢやないか。さういふ風に別々なこと
をひとつにくつつけて言ふのは、舊式な、迷信に近い考へ方だつて……。』

『それはさうだけでも——』

『むしろそれよりも、そのために却つてその結び付きが固くなるといふ方が本當
ぢやないか？』

お銀はだまつてゐた。それはさうに相違なかつた。ひとつの事柄とまた別なひ

とつの事柄とを一緒にするといふことは變なことだつた。あまり普通すぎるためにさうなつて行くのだつた。

『でも、私にはよくわからない。たゞさういふ氣がするといふだけなんです……』
『それはさういふ氣はするだらう。いや、世の中のことといふものは多くはそれでお互ひに牽制し合つてゐるやうな形がある。所謂お互ひ持といふことだ……。お前なんかにはよくわからないかも知れないけども、それは心の相互扶助といふことにもつゞいてゐる。そのために互に牽制し合つて、自分だけであるといふ心を失くすやうにしてゐる……。それもわるくはない。しかしさういふ考へ方をすればするほど、その心の悩みは樂になるけれども、折角つかんだ立派なもの、影はうすくなる。それを言換へれば、通俗になり且つ平凡になる。だから、私たちのやつてゐることから言へば、さういふことは一つの妥協であり、ひとつの敗北である。我々のやつてゐる戀愛はさういふものゝために汚され、また平凡にされ

るといふことはあまり好いことぢやないと思ふね』

『むつかしいことはわからないけども……さういふ氣がしたんです……』

『さういふことは飽くまでも打克たなければならぬだらうな？ 純であればあるだけ、さういふものに支配されないんだらうと思ふな』

『それぢや、さういふ氣兼みたいなものはないわけなんですか？』

『好いどころぢやない。その方が本當なんだと思ふな……。實際、別々なんだから……』

『それはさうね』

しかしそれはひとつの理想であつて、何の點までそれが實行されるかは島田にも疑問であつた。ひとりの道——世間の雜り合はない戀愛——何んなにその周囲のものがその破壊力を逞しくしても、びくともしない戀愛——あの震災のもつと大きいものがあつて、あらゆるものが亡びても死にまで破壊されずに到達する戀

愛——さういふものは、この世には望むべくあまりに理想的であらう。ある人に取つては、むしろそれは痴人のたはけた夢にしか過ぎないかも知れない。しかし島田たちにはそれを捨てる必要は少しもないのであつた。死にまでそれを把握することが當然だつた。

火の中でも水の中でも——また何んなに複雑に影響されて来るその周囲の巴渦の中でも——死ぬまでは——こんな風にやつぱり島田は考へるのだつた。

『まア、兎に角、お前のことでも僕の方のことでも、手を盡して見るだけはずくして見なければならぬんだから——それは僕の方のことを心配して呉れるのはありがたいが、それよりもお前の身體のことは、もつと直接なんだから、是非ひとつ本當に誰かに診て貰ふことが肝心だと思ふな……。やめるのわかれるのなんていふ風に考へずに、もつとそつちの道を行く方が本當ぢやないかと思ふな』

一二九

島田はかれ等の戀が既に行き着くところに近づきつゝあることを思はずにはゐられなかつた。かれは深夜に目覺めてひとりそのことを考へた。

ずつと通つて來た一條の路がそれとたどられるやうな氣がした。否、むしろそれがさまざまの繪になつてかれの眼の前に浮んで來た。かれのやつて來た戀は渦のやうな巴狀線でもなければ斷續窮りなき曲線でもなかつた。まばらまばらになつてゐる直線をそのまま何本も一緒に束ねたやうなものでもなかつた。いつも親しい友達に對してかれが言ふやうに、『他が考へてゐるほどそれほど遊蕩的でもない』のであつた。むしろそれはその正反對であると言つても然るべきであつた。かれはずつと昔のことを頭にくり返した。まだお銀も知らず片戀で終つた女學生をも知らない時分のことをくり返した。やつぱりその時分

からかれの戀愛は一本氣であつた。また飽くまで一つのものに對する執着であつた。かれは何うにかなるだらうなどといふ心持——その相手を手に入れさへすればそれで後は何うなつても構はないといふやうな心持——更に言ひかへれば、本能に引摺られてすぐ盲目になつて了ふやうな心持——それもないではないが時にはさういふ心に支配されて、危くそつちに墜ちて行きかけたこともないではないが、つたが、しかも何方かと言へば、やつぱり眞直な路を通つて來た方だつた。とても多くの男や女に見るやうな自由な心持になることは出來ない方だつた。『何うしてさういふ氣になれるだらうね？ もつと大切なものにして置きたくはないかね？』他に聞かれて恥しいとか何とかいふのはそれは世間體見たいなもので、何もさういふものに捉へられなくとも好いが、花火線香見たいにばちばち小綺麗にもえて了ふのもあまり薄つぺらではないかといふ氣はしないかね……。何うせやるなら、もう少し大きな火を燃やしたくはないかね……。』かういふことをかれは

度々口にした。勿論さうは言つても、さういふ戀愛を決して馬鹿にしてゐるのではなかつたけれども——さういふ刹那的な戀の爲方も共鳴出來ないことはなかつたけれども、少くともかれ自身でやる段になると、さういふ風にはちばちやつて了ふことは出來なかつた。むしろさうすることを好まなかつた。従つてかれは長い間燃えもせずにくすぶつてゐるやうな戀を何遍か經驗した。かれは微に烟を立てながら、そののもえ出して來る時をいつかいつかと待つやうな戀をした。時には少し烟を出しただけで、落葉がしめつてゐたために、そのまゝ消えて了つたやうな戀をもした。しかしそれでも、その消えた戀の焰でも花火線香のやうにばちばちすんで了つたやうなものではなかつた。それにしてもその燻つた煙が風を得てぱつと燃え上つて來る時の心持、そのはりつめた心持。それをかれは何とも言へない喜びをもつて見つめた。かれは尠くともさうした火を二度か三度もやつて見たことを思ひ起した。

『それでは何んな戀でも、こつちの心持次第で、向うが燃え出して來ることがあるものでせうか？』ある時から誰かゞ問うたのに對して、『たしかにもえ出して來るか何うかは言へないけどもね。さうした心持からひとりでに風が起つて來るかも知れないね。しかしそこまではつきり云つて了ふべきものではあるまいね』などと云つたことをかれは思ひ起した。

一三〇

異性をひとつの偶像のやうにしてあつかつて來たかれを見た。またその偶像が破壊されたあとに今度はあべこべにわるく客觀したやうな態度を取つたかれを見た。單なる對者としてのみ見ることを痛感したかれを見た。何處まで行つても何うにもならないかれを見た。結局自然の力と言つたやうなものに引摺られて來たかれを見た。年を経たならば、いろいろな新しい心の境も

開けて來るだらう、異性に對する心持などもその時はぐつと變つて來るだらうなどと想像してゐたことは丸で違つて、やつぱり同じやうに異性に對しては無明であるかれを見た。『年を取つたつて、そればかりは同じですよ。ちつとも違ひはしませんよ。墓場にまでその戀を持つて行くだけですよ』こんなことを笑ひながら言つてゐるかれを見た。否、そればかりではなかつた、ひとりである時にもそれをさびしく頭に描いて、愛してゐるものを何うしても置いて行かなければならぬ悲哀にもだえてゐるかれを見た。『それはさうだらうな、お前がゐるから好いやうなもの、もしゐなくなつたら、ひとりではゐられないだらうな』無論冗談ではあるがそんなことを言つてゐるかれを見た。そのくせ、もしかの女がゐなくなりでもしたら、何んな大きな打撃を受けるか知れないやうなかれを見た。それこそ山にでも遁れて了ひはせぬかといふやうなかれを見た。何處に行つても、何んな荒山の中に行つても、また何んな沙漠の中に行つても、言葉も違へば風俗も違

ふ人種の中に行つても、いつもその戀を深く抱いて離さずにゐるかれを見た。

従つて到るところに戀を見せてゐるかれを見た。戀になやんでゐるものばかりではなく戀に戯むれてゐるものにも、深い深い共鳴を感じてゐるかれを見た。(戀を見出してはじめてその人が本當に親しまれるやうな氣がするのだ。何故、人間はもう少し戀愛に對して自由で福さいはくでゐられないのだらう。それは戀の祕密といふことはあるけれど、さういふ風に氣兼ねをしなくつても好ささうなものだ……。もつと明るい戀をしても好ささうなものだ)こんなことを度々考へてゐるかれを見た。また、その身でその戀の末路を想像して、かうした未曾有の戀の歡樂を恣にしてゐる以上、當然それに對する報酬を受けなければならぬといふことをひとりぎめにきめてゐるかれを見た。常にさうした戀愛の末路の光景を到るところにさがし出して、その身もそれを免かれることが出来ないといふ風に考へてゐるかれを見た。それは何うせ人間は長續きしないものである。絶えず移りつゝあるも

のである。幼、老、死はまぬがるゝことの出来ないものである。しかしその中でもかれなどは最も多くまた最も強くその自然の影響を受けなければならない身であるといふ風に常に考へてゐるかれを見た。しかもをりをりはその未曾有の戀の歡樂に自らも満足して、さういふ自然の報酬がやつて來た時には潔くそれを受けようとしてゐるかれを見た。

更に大きく、兎に角に一すぢにまじめに通つて來た戀愛の直線の、八分乃至九分通りをすでに通り越して終りに近いところ——それから先きもその直線について行つてはゐるのであるが、しかも霧見たいなものに包まれてはつきりとわかないところにさびしくもかの女と並び立つてゐるかれを見た。

一三一

島田の方からも、お銀の方からも、見えないものであつて、また同時にかれ等

自身丈は何の関係もないものである、或力がひそかに暗に働きかけて来てゐるのをかれ等は感じた。かれ等はそこにある不可思議なもの、逼つて来るのを見た。かれ等は別々にゐる時でも、またふたり一緒にゐる時にでも、常に深い深い溜息をつくやうな日を送つた。新しい戀の金屋も、立派に粧飾されたかれ等の一室も、もはや以前のやうな楽しさを齎しては來なかつた。戀の深淵の底に横はつてゐる或るもの、冷めたさが常にかれ等の心に觸れた。

もはや何うにもならないやうな氣がした。いくらかそれを拒^ふがうとしても、またいくらそれに對抗しようとしても、その力はじりじりと靜かに冷めたく、さながら極地の氷でもあるやうに一步一步かれ等に近寄つて來るのを感じた。お互ひに慰め合つても、それは慰めにならなかつた。またお互ひに心と心とを合はせても、その暗いわびしさを取去ることは出來なかつた。それはたとへて見れば、とても勝つことの出來ないものに向つて止むを得ずいくさをしなければならぬや

うなものであると同時に、とてもダメといふことを覺悟しながらその行くべきところへ行かなければならぬやうなものだつた。島田はだまつてそこに來て坐つた。

『何う?』

『やつぱり同じだね、何うにもならんね……。しかしいくら考へたつてしやうがないから、成るだけ考へないやうにしたよ……。これもかうなる運命見たいなものだつたんだらう?』

『さうね』

いつものお銀の溜息が出た。そしてそれと同時に、今度はお銀についての心配が島田の口から出るのだつた。

『やつぱりまだ行つて診て貰ふ氣にはならないのかね?』

『こなひだ行くつもりだつたのよ……。着物まで出しかけたんだけど、そこに

誰かが来たのね……さう小園さん……。それでおじやんになつちやつた……』
『根がいやなんだからな……。何うかして、よさうよさうとしてゐるんだからな……』

『さうなのよ』

お銀は笑つて、『だつて、今度行つて診て貰へば、死の宣告をされる覺悟でなくつちや行かれないんですもの……』

『そんなことはないよ……思つたほどのことはないものだよ』

『その次ぎの日に行かうと思つたのよ……。ところがそれがわるい日なの？で、やめることにしちやつた……』

『それは無理はないとは思ふけれども、早く診て貰ふ方が好いと思ふな……。わるくなつて、もうダメだなんて言はれるのは情ないからな……』

『その中、きつと行くわよ』お銀はかう言つて話頭をかへて、『さう言へば、小園

さん、悲觀してたわ』

『うまく行かんのかえ？』

『やつぱりあの人の肺病がうつつたらしいのね？』

『ふむ——』

『そのくらゐのことはあつても好いと思ふわねえ……。あれで小園さんが仕合せではあの男の人があまりに可哀相だ……』

『そんな氣がするにはするな……』

『何でもうつつてゐるらしいわ。いやな、元氣のない顔をしてゐるわね、お母さん、せきも痰も出るやうね』傍に坐つてゐる母親に同意を求めやうに言つた。

『それで今度の旦那は何うなんだえ?』

『やつぱり面白くないんでせう。何しろあゝいふ役人なんてしみつたれですからねえ……。小金は持つてゐるにしてもやつとこさと溜めたやうなもんですからね。出しやしませんよ』

『それはさうだらうな』

『それに外に出るのをいやがるのが一番困るつて言つてゐましたよ』

『やつぱり心配になるわけだね?』

『やきもちやきなんですつて……。ちよつと近所へおしやべりに行つてゐても機嫌がわるいんですつて……。』

『何處へ行つても面白いわけには行かないわけだな……。』

島田が笑ひながら言ふと、

『だつて、さう旨くは行きませんね。たとへ好いつて言つたからつて、肺病の男

をそのまま放つたらかして、他にお嫁に行つて、それで好いわけがありませんよ。ちとひどすぎたんですもの……。』

『よつぽどわるいの?』

『何うもだるくつてしやうがないんですつて。血ぐらゐ少しは出たのかも知れませんが……。私に、一緒に行かないかと言つてゐました……。』

『でも、一緒になんか往かん方が好いな……。あまり交際しない方が好いよ』

『さうですとも……。私、病院になんか一緒に行きやしませんけどもね……。それでもあの人、この近所、のんきで好いつて言つて半日あそんで行きましたよ。』

こんな立派な宅が出来て羨ましいつて言つてゐましたよ……。』

それからそれへと桃子の話やお袖の話が出て行つた。

『桃子さんなんかあれでも出世した方ね』

『まアさうだらうな』

『内輪に行けば、あれでも、いろいろなことがあるでせうけどもね。兎に角あれだけのところのお上さんでゐられるんだから、成功の方ね。それに、もう籍も入つてゐるんだし……』

『あとが困らないツていふわけだね』

『さういふつもりで言つたんぢやないのよ。もう、そんな處はとうに通り越して來ちやつたわ。そんなことは心配してゐないわ、もう……。だつて、私がもしものがあつたつて、先生がおつかさんやおとつさんをほつたらかして知らん顔をしてゐるなんて何うしたつて思へないんですもの……。さういふ點では、もう安心だと思つてゐるわ』

『そこまで行けば、もう行くところまで行つたやうなもんぢやないか？』

『さうね。たとへ別れて了つてもお互にお互のわる口は言ふ氣づかひはないし、つまりないやきもちなどはやかないでせうし、何んところでひよつくりでつく

はしても綺麗に話が出来るわねえ……。そこまで來ただけでも、私、満足だと思ふの……。』お銀の眼には涙が光つた。

島田も、だまつて了つた。いつもの心のエクスタシイがまた二人の間に漲溢こぼれして來たのであつた。それにしても何うかしてこの病氣は治させてやりたい……。もとの體にしてやりたい……。かう島田は心の中で思つた。

一三三

お糸にお銀が言つた。

『お前、明日別に用もないだらう？』

『え、別に——』

『それぢやね、子供を皆な家へ連れて來てね……。あとは鍵でもして、お隣に頼んで……』

『何うするの?』

お糸には急に姉が何を言ひ出したのかわからなかつた。

『新ちゃん、休んでくれると好いんだけども、さういふわけにも行かないだらうしね……』

『それは都合で休めないこともないでせうと思ひますけど……?』

『でも、せつかく掛長にも信用されてゐるところを、急に休んだりして、何とか思はれるといけないからね……』

『それで、一體……』

お糸がその理由をきかうとしてかう言ひかけるのを押しかぶせるやうにして、

『ぢや、好いね……。お隣に頼んで置けば大丈夫だらう……』

『なんなの? 一體……?』お糸は半ば顔を母親の方へ向けた。

母親は佗しさうに、『……あそこに行かうつていふんだよ……』

『あゝ、病院へ?』

お糸にはそれでわかつて、『それで私について行けッていふの?』

『さうなの……』

かう言つた神経性のお銀の顔は一層わびしさうに蒼白く見えた。

『私、また、何かと思つた……? いやにまじめなんですもの……。そんなことなんでもないぢやないの? お隣に頼んで置けば大丈夫ですとも……。内に休んで貰つたつてわけないはないけども……Y病院でせう?』

『さう……』

お銀は點頭いて見せた。

『その方が好いのよ……。ひとりでヂリヂリしてゐたつてしやうがないんですもの……。レントゲンに照らして貰ふだけでも好いぢやありませんか……。』何も知らないお糸は軽い調子で言つた。

母親もお銀も言ひ合せたやうにだまつた。

一座はわるく白けた。

暫くしてからお銀が言つた。『それぢやお前、別に都合がわるくはないね……』

『え……』

『朝、成るだけ早い方が好いよ……。九時くらゐまでに向うに行つてゐる方が好いんだつて言ふから……。部長さんの來るのは十時になるさうだけども……』

『先生、知つてゐるの？』

『それは知つてゐるともね、お前……』

母親が傍から言つて、『先生があそこの部長さんに頼んで見てくれたんだよ。ちやんと手筈はしてあるんだけどもね。何うも、さういふ病氣を何うもせず長く放つて置いたことはいけないツツて言ふんだつて……』

『部長さんが？』お糸は母親の點頭くのを見て、やつと皆なが沈んでゐるのがわ

かつたといふやうに、『さうなの？ それは困りますねえ……』もう一度母親の顔と姉の顔とを見て、『でも、まだ診たわけぢやないんでせう……。そんなに取越苦勞なんかしなくつたつて大丈夫よ……。診た上でさう言はれたんなら、それは困るけれど……』

『兎に角、それぢや行つておくれね。明日の朝、八時には宅を出たいと思ふからね……』

まじめなお銀の調子がわるくお糸の心を震はせた。

一三四

『それぢやおつかさん行つて來ますよ』

お銀はかう快活に言つて、そのまゝ三疊の玄関の方へと出て行つた。寒かつた冬もいつか過ぎて、垣には梅の花などが咲きかけてゐた。

お糸はラクダのコートを着てそのあとから續いた。

『お前よくいろんなことを聞いておくれ……。先生はお出でにならないかも知れないから……。』

前にもその事を言つたのだが、もう一度母親はかう繰返した。

比べてはいくらか脊の低いお銀が昨夜結つたばかりの丸髷をあたりに見せてお糸と並んで歩いて行くのが、まが朝の早いつめたい空氣の中にくつきりと浮き出すやうに見えてゐた。母親は眼がわるいだけけれどもそれでも脊延びするやうにして、いつまでもいつまでもじつとそれを見送つた。母親の胸にはまだ幼なかつた時分の二人の姿がそれとなく浮んで來た。續いて新潟の鐵工所で死んだお銀の弟のことが思ひ出された。『あいつさへ生きてゐてくれれば、お銀だつて肩荷が下りたのに……。』かう思つた時には、涙がほろほろとその皺の多い頬を傳つて落ちた。

もう一度見た時には、同胞きょうだいの姿はもうそこには見えなかつた。

それとは反對に、お銀とお糸とは徐かに歩いた。別にいつもと違つてはゐなかつた。

『寒いね』

『それでも、もう、ねえさん、随分暖くなつたのよ』

『それはさうだけでも……。いつもこんなに早起きしたことはないからね』

『それはさうね』

『新ちゃん、休ませて氣の毒だつたね？』

『そんなことはちつともないのよ。もし何だつたら——歸るのが早かつたら、晝からでも出てお好いんだからなんて言つてゐましたから——』

兎に角妹たちを幸福とは行かないまでもそれに近いところまでしてやつたといふことが、またしてもお銀の胸にかなり鮮かに浮かんで來た。しかもお銀はいつものやうにそれを口に上さなかつた。それほどかの女の心持はまじめな眞剣さ

に觸れてゐた。あたりの朝の、つめたい空氣にそのまま觸れでもしてゐるやうに。

暫くだまつて歩いてから、

『新ちゃん、いくつだつたつね?』

『さうね。三十五……』

『もうさうなるかね。皆な年を取るわけだね。さうすると、新潟で死んだ人が生きてゐるとすると、もう三十七ね……。たしか二つちがひだつたから……』

『さうなりますね』

またすたすた歩いた。

『人間つて、おもしろいものね。段々先へと行つて了ふのね』

『さうね』

『まだ、お前なんかにはそんなことはわからないだらうね? そんなこと考へたことさへないだらうね?』

『さうね……』

それきりまた歩くだけになつた。静かな朝——労働者が時間におくれて急いで軒下を歩いて行くのがそれと見えるだけで、あたりはひつそりとしてゐた。それに引きかへて、お銀の頭にはいろいろなものが、向うで賑やかに暮してゐた時のさまが、その賑やかさも今では全く異つたものになつてゐるさまが早く早く通つて行つた。

停留場に来て、そのプラットホームのところに二人は、その美しい姿をあらはした。

一三五

大きな病院の待合室でもお銀の姿は他の眼を惹くに足りた。白い服を着けた若い醫者なども皆な此方の方を見つゝその前の廊下を通つて行つた。

お糸は曾て此處に一度來たことがあるので、その手續などにはよく熟してゐた。かの女は先づそこに置いてある紙に住所と姓名とを書いて、それを型のごとく入口の受附へと持つて行つて出して、順番の來るのを待つてから、金を拂つて診察券を貰つて、それを婦人科の受附のところへと持つて行つた。お糸は、『今日は部長さんの診察日ですね』と念を押してから、廊下の左側にある待合へとお銀を誘つて行つた。

『随分込んでゐるものね』

『でも診察が始まりさへすれば、おきでせう？ そんなにおそい番號ぢやないやうでしたから……』

『一體、まだ始まらないのかしら？』

『何でも部長さんの來るのは十時ごろよ』

『それぢや、まだ随分時間があるね……』お銀はさう言つて、向うにかけてある

大きな時計の針の九時少し前のところをさしてゐるのを見上げた。

スチームが入つてゐるので室の中は五月くらゐに暖かく、大きな鉢の木瓜ぼけが見事に赤く咲いてゐるのをじつと立つて見たり、または賣店の雑誌店の前で退屈を凌ぐために週刊ものや新聞を買つたり、それにも讀み倦きて、ずつと別な長い廊下を奥の方まで行つて見たりしたが、そこに一つの移動ベッドに瘦せこけた蒼い顔をしてゐるひとりの女の患者が仰向けに寝たまゝ看護婦に押されて來るのを眼にした時には、思はずはつとしてそこに足を留めずにはゐられなかつた。かの女は今でこそかうして立つてゐるが、診て貰つた結果、何と言はれるか、すぐ手術せよと言はれるか、それともまた、もう手おくれで何うにもならないと言はれるか——さうは言はないまでも、それに近いことを言はれはしないか、かう思ふと、急に冷めたい鐵にでも觸つたやうに身内まで寒くなるやうな氣がして、そのまま急いでもどつて來た。

廊下を曲らうとして、お銀はばつたり向うから島田がやつて来るのに出會した。

「あや！」

「來ないつもりでゐたけれど、やつぱり心配になつてとてもじつとして家にゐられないからやつて來たよ……。今、部長に逢つてよく頼んで來た……」

「さう——」

お銀の顔は明るくなつた。

「もうさつきから來てるの？」

「いえ、もう少しさつき來たばかりなの……。お糸に逢つた？」

「いや」

「待合室にゐるのよ」

「さう……」

かれ等はそれでも互に力を得たといふやうに——死ぬまでは兎に角に互にその傍を離れまいとするやうに、そのまゝ並んで、徐かにその長い廊下を歩いて行つた。

(完)

昭和十年三月廿三日印刷
昭和十年四月三日發行



10. 2. 53

小説「百夜」
定價一圓八十錢

著者 田山花袋

發行者 東京市麹町區丸ノ内二丁目一番地
木田開

印刷者 秋葉信

發行所 東京市麹町區丸ノ内二丁目
丸ノ内ビルヂング五九二區
中央論社

振替口座 東京三四番
電話丸ノ内 五三五番
五三六番
五三七番

秀英舎整版印刷

★またと得がたき、君が人生の至親至高の伴侶★ 中央公論社出版部

| | | | | | | | | |
|----|----|------|-----|----|------------------|--------------------|--------------------|---------|
| 筆隨 | 柿 | の | 蒂坪内 | 逍遙 | 平福百穂裝幀 菊判三二〇頁 | 定價二圓五十錢 | | |
| 寫眞 | 紀行 | ヒマラヤ | の | 旅 | 長谷川傳次郎 | 布地倍裝 四六判四九〇頁 | 定價十一圓 | |
| 筆隨 | 荷 | 風 | 隨 | 筆 | 永井荷風 | 著者自裝 四六判四九〇頁 | 定價一圓八十錢 | |
| 筆隨 | 青 | 春 | 物 | 語 | 谷崎潤一郎 | 木下幸太郎裝幀 四六判二四〇頁 | 定價一圓七十錢 | |
| 論評 | 文壇 | 人物 | 評論 | 正宗 | 白鳥 | 麻布裝幀 四六判四八〇頁 | 定價一圓五十錢 | |
| 筆隨 | 直木 | 三十五 | 隨筆 | 集 | 直木三十五 | 黑縐子裝幀 四六判六六〇頁 | 定價一圓五十錢 | |
| 論評 | 藝 | 術 | 論 | 藏原 | 惟人 | 麻布裝幀 四六判五〇〇頁 | 定價一圓五十錢 | |
| 筆隨 | 春 | 城 | 代 | 醉 | 錄 | 市島春城 | 藥囊地裝幀 四六判六〇〇頁 | 定價一圓八十錢 |
| 筆隨 | 文 | 藝 | 林 | 泉 | 室生犀星 | 著者自裝 四六判五七〇頁 | 定價二圓 | |
| 筆隨 | ド | ン | ク | 辰 | 野 | 隆 | 黃唐紙仙紙裝幀 四六判四〇〇頁 | 定價一圓五十錢 |

★日本國民常識讀本の至寶★ 中央公論社出版部

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|-------|----------------------|-------------------|-------------------|---------|
| 金 | の | 經 | 濟 | 學 | 猪俣津南雄 | 黒クローヌ裝幀 四六判一〇〇〇頁 | 定價一圓五十錢 | | |
| 唯 | 物 | 辨 | 證 | 法 | 讀本 | 大森義太郎 | 著者自裝 四六判四〇〇頁 | 定價一圓二十錢 | |
| レ | コ | ー | ド | 音 | 樂 | 讀本 | 野村光一 | 山六郎裝幀 四六判八〇〇頁 | 定價一圓八十錢 |
| 議 | 會 | 政 | 治 | 論 | 馬場 | 恒吾 | 麻布裝幀 四六判四四六頁 | 定價一圓五十錢 | |
| 現 | 代 | 人 | 物 | 評 | 論 | 馬場 | 恒吾 | クローヌ裝幀 四六判五二〇頁 | 定價一圓五十錢 |
| 政 | 界 | 人 | 物 | 風 | 景 | 馬場 | 恒吾 | レザ一裝幀 四六判五三二頁 | 定價一圓五十錢 |
| 日 | 本 | 合 | 戰 | 譚 | 菊池 | 寛 | 鈴木朱雀裝幀 四六判五三〇頁 | 定價一圓五十錢 | |
| 文 | 章 | 讀 | 本 | 本 | 谷崎潤一郎 | 更紗白絹地紙裝 讀本三〇〇頁 | 定價一圓五十錢 | | |
| 軍 | 縮 | 讀 | 本 | 本 | 伊藤正徳 | クローヌ裝上質カバ 四六判四五〇頁 | 定價一圓五十錢 | | |
| 政 | 界 | 人 | 物 | 評 | 論 | 馬場 | 恒吾 | 中村研一裝幀 四六判五二〇頁 | 定價一圓五十錢 |

★繕いて面白く味うて實ある絢爛たる小説讀物陣★ 中央公論社出版部

| | | | | | |
|------|----------|----------------------|----------------------|--------------------|-----------------|
| 長篇小説 | 沈 丁 | 花久米 正雄 | 津田青楓裝幀 四六判五〇〇頁 | 定價二圓五十錢 送料十錢 | |
| 長篇小説 | 男 裝 | の麗人村松 梢風 | 岩田專太郎裝幀 四六判四〇〇頁 | 定價一圓三十錢 送料十錢 | |
| 長篇小説 | 眞 理 | の春細田 民樹 | 玉村善之助裝幀 四六判七〇〇頁 | 定價一圓五十錢 送料十錢 | |
| 長篇小説 | グランド・ホテル | グイツキ・バウム著 牧 逸 馬 譯 | 著者自装 四六判七〇〇頁 | 定價一圓七十錢 送料十錢 | |
| 實話 | 娼妓解放 | 哀話沖野岩三郎 | 著者自装 四六判四〇〇頁 | 定價一圓二十錢 送料十錢 | |
| 實話 | 武藏野 | か大東京へ白石 實三 | 池田永一治裝幀 四六判四二〇頁 | 定價一圓四十錢 送料十錢 | |
| 實話 | 新版日本崎人傳 | 白石 實三 | 田中咄哉州裝幀 四六判五五〇頁 | 定價一圓五十錢 送料十錢 | |
| 實話 | 旋風時代 | (全三卷) 田中貢太郎 | 田中咄哉州裝幀 四六判各卷四八〇頁 | 定價各卷一・二〇 送料各卷十錢 | |
| 長篇小説 | U新聞年代記 | 上司 小劍 | 石井鶴三裝幀 四六判三五〇頁 | 定價一圓五十錢 送料十錢 | |
| 長篇小説 | 青 年 | 林 房 雄 | 木村莊八裝幀 四六判六八〇頁 | 定價一圓五十錢 送料十錢 | |
| 長篇小説 | 黄 昏 | の 薔 薇 | 徳田 秋聲 | 富田千秋裝幀 四六判四七〇頁 | 定價一圓五十錢 送料十錢 |

| | | | | |
|------|-----------|-------------------|--------------------|---------------------------|
| 時代小説 | 女 人 | 曼陀羅 吉川 英治 | 小田富彌裝幀 四六判八〇〇頁 | 定價一圓八十錢 送料十錢 |
| 戦争小説 | 西部戦線異状なし | レマール 著 泰 豊 吉 譯 | ランヤ紙裝幀 四六判四三二頁 | 定價一圓五十錢(上型) 送料七十五錢(並型) |
| 歴史小説 | 楠 木 正 成 | 直木三十五 | 岩田專太郎裝幀 四六判五〇〇頁 | 定價一圓二十錢 送料十錢 |
| 時代小説 | 濡 れ 閣 | の男長谷川 伸 | 岩田專太郎裝幀 四六判五〇〇頁 | 定價一圓二十錢 送料十錢 |
| 科學物語 | 科學 隨 想 | 西村 眞琴 | 銀灰色布裝幀 四六判三六〇頁 | 定價一圓四十錢 送料十錢 |
| 科學物語 | 近代科學の驚異寮 | 佐 吉 | コバルト布裝幀 四六判五三〇頁 | 定價一圓六十錢 送料十錢 |
| 史話 | 廢 帝 | 前 後 黒田 禮二 | 朱赤クロス裝幀 四六判六七〇頁 | 定價一圓八十錢 送料十錢 |
| 紀行 | 踊 る 地 平 線 | 谷 讓 次 | 木村莊八裝幀 四六判七八六頁 | 定價二圓五十錢 送料十錢 |
| 歴史小説 | 水 戸 黄 門 | 大佛 次郎 | 松村亥太裝幀 四六判六七〇頁 | 定價一圓七十錢 送料十錢 |
| 長篇小説 | 首切セレナーデ | ゴッパ 著 武林無想庵 譯 | 總クローヌ製 四六判四〇八頁 | 定價一圓二十錢 送料十錢 |
| 照業手記 | 黒 髪 懺 悔 | 高岡 たつ | 山川秀峰裝幀 四六判四六六頁 | 定價一圓五十錢 送料十錢 |
| 大衆小説 | 三萬兩五十三次 | 野村 胡堂 | 鈴木朱雀裝幀 四六判上下二卷 | 定價各一圓十錢 送料各十四錢 |

★彫心鏤骨の傑作・日本藝苑至高の誇★ 中央公論社出版部

小説 安城家の兄弟里見 葎 小穴隆一装幀 定價一圓八十錢
四六判一〇八〇頁 送料廿二錢

小説 寢 園横光利一 佐野繁次郎装幀 定價一圓八十錢
四六判四一八頁 送料十四錢

小説 つゆのあとさき永井荷風 著者自装 定價一圓五十錢
四六判四五六頁 送料十四錢

小説 盲 目 物 語谷崎潤一郎 著者自装 定價一圓七十錢
四六判判和装 送料十四錢

小説 女 の 一 生山本有三 中村研一装幀 定價一圓八十錢
四六判七九〇頁 送料十四錢

小説 神 風 連十一谷義三郎 川端龍子装幀 定價(上)一圓八十錢
四六判上二〇〇頁(下)一六〇頁 送料各十四錢

小説 武 州 公 祕 話谷崎潤一郎 近 刊

戯曲 忠 臣 藏眞山青果 近 刊

隨筆 無 絃 琴内田百間 小杉放庵装幀 定價二圓
四六判三三二頁 送料十四錢

希觀 明治文學の片影佐佐木信綱 小村雪岱装幀 定價三圓
菊判三〇八頁 送料十四錢

隨筆 神・人間・自由木下尚江 小川芋錢装幀 定價一圓七十錢
四六判四三八頁 送料十四錢

357
340

10年4月13日

136

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 田 | 田 | 田 | 多 | 上 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 |
| 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 |
| 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 |
| 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 |
| 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 |
| 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 |
| 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 |
| 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 |
| 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 |
| 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 |

閱覽濟

終